

概 況

[歌舞伎界]

公演中止続き、配信も始まる

小玉祥子

新型コロナウイルス感染拡大は演劇界にも大きな打撃を与えた。歌舞伎興行も二月までは通常通りに千秋楽まで行われたが、政府の自粛要請を受けて三月の歌舞伎座、南座、明治座などの公演の一部中止が発表された。中止期間は数度にわたって延長された末に、全公演中止となった。三月から七月までの興行はほぼ無くなり、本公演は歌舞伎座の「八月花形歌舞伎」から再開された。

一月は例年の通り、東西の六座で歌舞伎公演が行われた。

歌舞伎座は「寿 初春大歌舞伎」。同座の正月らしく大幹部と花形世代が共演する、みどり形式。昼は梅玉の豊田秀吉らによる舞踊「醍醐の花見」から始まり、雀右衛門の袖萩、芝翫の貞任、勘九郎の宗任による「袖萩祭文」、吉右衛門の太郎冠者、雀右衛門の姫御寮、又五郎の大名某による「素襖落」、白鸚の河内山、芝翫の松江出雲守による「河内山」、夜が白鸚の五斗兵衛、芝翫の義経、歌六の泉三郎による「五斗三番叟」、猿之助の狂言師右近後に親獅子の精、團子の狂言師左近後に仔獅子の精による「連獅子」、勘九郎の猿蓑氏、七之助の傾城螢火実は丹鶴城の姫による「鯛賣恋曳網」であった。

国立劇場は「菊一座令和仇討」。菊五郎劇団が主体になる正月恒例の復活演目の通し上演である。鶴屋南北の顔見世狂言をもとに、国立劇場文芸研究会が補綴したお家騒動物。菊五郎の俠客幡随院長兵衛と実は天下を狙う源範頼である閑心の二役、時蔵の三日月おせん、松緑の笹野権三、菊之助の白井権八の配役。実は兄弟という設定の権三と権八が両花道で対峙し、お化け騒動や権八が女に化けて現れるなど趣向豊かな作品に仕上がった。

新橋演舞場は市川海老蔵ら花形世代が主体の「初春歌舞伎」。昼が孝太郎の雪姫、獅童の松永大膳、右團次の久吉による「金閨寺」、海老蔵の長兵衛、蒼玉の権八による「鈴ヶ森」、海老蔵、獅童、児太郎、右團次らによる「NINJA KABUKI」と銘打った秋元康作・演出、田尾下哲演出の新作歌舞伎「雪螢恋乃滝」。夜が海老蔵の辰五郎、孝太郎のお仲、梅玉の焚出し喜三郎、右團次の四ツ車による「め組の喧嘩」、海老蔵の仲国、児太郎の小督の局による「平家物語」に題材をとった舞踊「雪月花三景 仲国」。

浅草公会堂は「新春浅草歌舞伎」で若手主体。一部が橋之助による舞踊「花の蘭平」、松也の松王丸、新悟の千代、隼人の源蔵、米吉の戸浪による「寺子屋」、巳之助の熊鷹太郎、歌昇の麻胡六、錦之助の目代某による

「茶壺」、二部が歌昇の光秀、新悟の操、隼人の十次郎、米吉の初菊、錦之助の久吉による「絵本太功記 尼ヶ崎閑居」、松也の由良之助、巳之助の平右衛門、米吉のお軽による「忠臣蔵 祇園一力茶屋」。

大阪松竹座は「初春大歌舞伎」。昼が大森痴雪作「九十九折」。四十五年ぶりの上演となった。幸四郎の清七、壱太郎がお秀と雛勇の二役、愛之助の力蔵。次が愛之助による「大津絵道成寺」、扇雀のお園と半勝の二役、鴈治郎の半七と宗岸の二役、橘三郎の半兵衛による「酒屋」、夜が愛之助の佐藤忠信・忠信実は源九郎狐、壱太郎の静御前、秀太郎の義経による「義経千本桜 川連法眼館」、鴈治郎の伊左衛門、扇雀の夕霧による「夕霧名残の正月」、幸四郎の幸次郎、鴈治郎の鳩照太夫による「大當り伏見の富くじ」。

御園座は「坂東玉三郎新春特別舞踊公演」で「口上」「雪」「阿古屋琴責」「鐘ヶ岬」。

二月は歌舞伎座が「二月大歌舞伎」。十三世片岡仁左衛門二十七回忌追善狂言が昼、夜で上演され、十三世の子である我當、秀太郎、仁左衛門の三兄弟が顔を揃えた。昼が「菅原伝授手習鑑」の「加茂堤」「筆法伝授」「道明寺」。十三世が得意とし、自身もあたり役とする菅丞相を当代仁左衛門が演じた。「加茂堤」では勘九郎が桜丸、孝太郎が八重、「筆法伝授」では、梅玉が源蔵、時蔵が戸浪、秀太郎が園生の前。「道明寺」では、玉三郎が覺寿にまわり、孝太郎が立田の前、千之助が苅屋姫と松嶋屋の三代が出演した。歌六が土師兵衛、彌十郎が宿禰太郎、芝翫が判官代輝国で周囲を固めた。

夜はみどり形式で、最初が十三世追善狂言の「八陣守護城」。我當の正清、進之介の斑鳩平次。次が玉三郎の天女、勘九郎の宅内による「羽衣」、続いて菊五郎の長兵衛、雀右衛門のお兼、時蔵の角海老女房、梅枝の文七による「文七元結」。最後が十三世追善狂言の秀太郎の梅川、梅玉の忠兵衛による「道行放郷の初雪」。

博多座は猿之助、隼人の交互出演の小栗判官と遊行上人、新悟の照手姫によるスーパー歌舞伎Ⅱ「新版オグリ」。

大塚国際美術館は愛之助、壱太郎、今井翼、舞羽美海による新作「NOBUNAGA」が上演された。

南座は「市川海老蔵特別公演」。児太郎の天女、廣松の伯竜による「羽衣」、「ご挨拶」、海老蔵の弁慶、児太郎の義経、右團次の富樫による「勸進帳」。

三月の歌舞伎座「三月大歌舞伎」は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、中止となった。昼は福助、芝翫らによる舞踊「雛祭り」で眼目は「新薄雪物語」の「花見」「詮議」「広間」「合腹」。吉右衛門の幸崎伊賀守、

仁左衛門の園部兵衛、魁春の梅の方、梅玉の葛城民部、歌六の秋月大膳、雀右衛門の松枝、又五郎の団九郎、扇雀の籬、芝翫の妻平、幸四郎の左衛門、孝太郎の薄雪姫という好配役であっただけに惜しまれる。

夜は白鷺による「石切梟原」、幸四郎による「高坏」があり、最後の「沼津」は、本興行では初めて白鷺が平作、幸四郎が十兵衛を演じる話題の舞台であった。同公演は初の試みとして、舞台収録映像が四月に無料配信された。

国立小劇場は菊之助が佐藤忠信実は源九郎狐、渡海屋銀平実は新中納言知盛、いがみの権太をつとめる「義経千本桜」をA、B、Cの三つのプログラムに分けて上演する予定であったが中止が発表され、四月に舞台収録映像が無料配信された。

明治座は「三月花形歌舞伎」で、昼が彦三郎の松王丸、巳之助の梅玉丸、壱太郎の桜丸による「車引」、勘九郎の駒形茂兵衛、七之助のお蔭による「一本刀土俵入り」、夜が勘九郎の清玄・釣鐘権助・大友頼国、七之助の白菊丸・桜姫による「桜姫東文章」が予定されていたが中止になった。

南座のスーパー歌舞伎Ⅱ「新版 オグリ」も中止された。

四月は歌舞伎座がメンテナンス工事のため休館で、新橋演舞場で「四月大歌舞伎公演」が予定されていた。昼は菊之助の弁天小僧、松緑の日本駄右衛門による「白浪五人男」、菊五郎の山蔭右京、左團次の玉の井による「身替座禪」、夜は吉右衛門の佐野次郎左衛門、菊之助のハツ橋による「籠釣瓶花街酔醒」、尾上右近の如月姫、米吉の衣通姫による「晒三番叟」、歌昇、萬太郎、種之助による「綱打」のはずであったが中止された。

御園座は「NARUTO」が予定されていたが、中止された。

恒例の「四国こんびら歌舞伎大芝居」も中止になった。「松本幸四郎改め二代目松本白鷺、市川染五郎改め十代目松本幸四郎襲名披露」で、第一部が幸四郎の境界坊・野分姫の霊による「境界坊」、第二部が白鷺の翁、雀右衛門の千歳、鴈治郎の三番叟による「寿式三番叟」、「口上」、幸四郎の木曾義賢、雀右衛門の小万、鴈治郎の下部折平実是多田蔵人による「義賢最期」。

四月一日初日の公文協(全国公立文化施設協会)西コースも中止された。仁左衛門が座頭の公演で、橋之助の五郎、壱太郎の舞鶴による「正札附根元草摺」、仁左衛門の権太、孝太郎の弥助実平は平維盛、壱太郎のお里による「すし屋」。

以降も五月雨式に興行の中止・延期が発表され、五、六、七月の興行はすべて中止となった。予定されていた主なものをあげる。

まず五、六、七月の三ヵ月続きの歌舞伎座公演「十三代目市川團十郎白猿襲名 八代目市川新之助初舞台」。

四月七日に延期が発表された。五月は昼が梅玉、時蔵らによる「祝成田木挽眼」、白鷺の由良之助、松緑の平右衛門、雀右衛門のお軽による「忠臣蔵七段目」、海老蔵改め團十郎の弁慶、幸四郎の富樫、猿之助の義経による「勧進帳」、夜が吉右衛門の工藤祐経、幸四郎の五郎、菊之助の十郎、魁春の大磯の虎による「寿曾我対面」、「襲名披露口上」、海老蔵改め團十郎の助六、菊之助の揚巻、左團次の意休、秀太郎の満江、菊五郎の白酒売、幸四郎の口上による「助六」。

六月は昼が猿之助、勘九郎による「二人三番叟」、雀右衛門のお三輪、芝翫の鱧七実は金輪五郎による「妹背山婦女庭訓 三笠山御殿」、「口上」、海老蔵改め團十郎の鎌倉権五郎、吉右衛門の清原武衡、菊五郎の加茂次郎による「暫」、夜が新之助の外郎売実平は曾我五郎、勘九郎の小林朝比奈、七之助の舞鶴、左團次の工藤祐経による「外郎売」、愛之助の鳴神、七之助の雲絶間姫による「鳴神」、海老蔵改め團十郎の弁慶、仁左衛門の富樫、玉三郎の義経による「勧進帳」。

七月は三部制を取り、一部が幸四郎の曾我五郎による「矢の根」、海老蔵改め團十郎の大館左馬五郎、勘九郎・菊之助の白拍子花子による「京鹿子娘二人道成寺」、海老蔵改め團十郎の五郎蔵による「男伊達花廊」、二部が海老蔵改め團十郎の山樵斧蔵実平は三田仕、新之助の怪童丸後に坂田金時、玉三郎の山姥による「山姥」、ぼたんの近江のお兼、右團次・獅童の漁師による「團十郎娘」、海老蔵改め團十郎の悪七兵衛景清、愛之助の秩父庄司重忠による「景清」、三部が白鷺の五右衛門、梅玉の久吉による「棧門五三桐」、海老蔵改め團十郎の助六、七之助の揚巻、幸四郎のくわんべら門兵衛、新之助の福山かつぎ、勘九郎の白酒売新兵衛、鴈治郎の意休、玉三郎の満江による「助六」のはずであった。

五月は赤坂ACTシアターで「赤坂大歌舞伎」が予定されていた。演目は「怪談 牡丹燈籠」(三遊亭圓朝原作、源孝志脚本・演出)。配役は獅童の宮野辺源次郎・伴蔵、勘九郎の黒川孝介・萩原新三郎、七之助のお露・お国・お峰。

五月一日からの公文協東コース「松竹大歌舞伎」は、橋之助の佐藤忠信・忠信実平は源九郎狐、芝翫の源義経、新悟の静御前による「義経千本桜 川連法眼館」、芝翫の狂言師後に親獅子の精、福之助・歌之助の狂言師後に仔獅子の精による「連獅子」。

六月は博多座が「博多座大歌舞伎」。昼が時蔵の天女、萬太郎の伯竜による「羽衣」、梅玉の徳川綱豊、松也の富森助右衛門、彌十郎の新井勘解由による「元禄忠臣蔵 御浜御殿」、菊之助の山蔭右京、彌十郎の玉の井による「身替座禪」。夜が梅玉の又平、時蔵のおとくによる「傾城反魂香 土佐将監閑居」、菊之助の与三郎、梅枝のお富、片岡亀蔵の蝙蝠の安五郎による「与話情

浮名横櫛 見染・源氏店」、松也の次郎冠者、萬太郎の高足売、片岡亀蔵の大名某による「高足売」。

国立劇場の恒例である六、七月の「歌舞伎鑑賞教室」も中止された。南座の「六月南座超歌舞伎」は獅童と初音ミクの獅子の精による「都染戯場彩」(松岡亮作)、獅童の源頼光・袴垂保輔、初音ミクの傾城七綾太夫実是将門息女七綾姫、國矢の平井保昌、蝶紫の山姥茨木婆による「御伽草子戀姿絵」で、リミテッドバージョンとして國矢の頼光・袴垂保輔が予定されていた。

七月の大阪松竹座は「関西で歌舞伎を愛する会」の「七月大歌舞伎」で、昼が孝太郎の鳴神尼、芝翫の佐久間玄蕃盛政、扇雀の雲野絶間之介による「女鳴神」、時蔵の「女伊達」、仁左衛門の杵屋弥市、時蔵の芸者米吉後に女房お米、芝翫の坂東彦三郎、松緑の市村家橘による「江戸節情話」、夜が歌六の鬼一、松緑の奴智恵内実は鬼三太、扇雀の奴虎蔵実は牛若丸による「菊畑」、仁左衛門の杵造、孝太郎のお白による「団子売」、芝翫の龍達、松緑の太十、時蔵のおいちによる「巷談宵宮雨」が予定されていた。

歌舞伎座での歌舞伎興行は「八月花形歌舞伎」から再開されることになり、七月十三日に製作発表記者会見が行われた。感染拡大を避けるため、すべて一本立ての四部制を取り、俳優、スタッフは部ごとに全員を入れ替えることになった。

第一部は愛之助の狂言師右近後に親獅子の精、壱太郎の狂言師左近後に仔獅子の精による「連獅子」。第二部は勘九郎の次郎冠者、巳之助の太郎冠者、扇雀の曾根松兵衛による「棒しばり」。第三部が猿之助の佐藤忠信実は源九郎狐、七之助の静御前、猿弥の逸見藤太による「吉野山」。第四部が幸四郎の与三郎、児太郎のお富、彌十郎の蝙蝠安、片岡亀蔵の藤八による「源氏店」。

各部の間を約二時間開けて消毒を行い、大向こうのかけ声は禁止、客席は半分で前後左右を空けて配置された。桟敷席には人が入らず、場内での私語をつつしむことなどが要請される異例の形態ながら、公演再開を喜ぶ観客の常にもまして激しい拍手が俳優を鼓舞した。

八月の「坂東玉三郎映像×舞踊南座特別公演」は中止された。Aプロが「京鹿子娘道成寺」、Bプロが「口上」、「驚娘」、「楊貴妃」であった。

八月三十一日初日予定の公文協中央コース「松竹大歌舞伎」は中止とされた。萬太郎の三番叟による「操り三番叟」、松也の六助、梅枝のお園による「毛谷村」、松也の梶屋久兵衛、梅枝の松山太夫による「二人枕久」のはずであった。

八月は国立小劇場で歌舞伎俳優と歌舞伎音楽の既成者研修発表会が続けて行われた。「第二十九回稚魚の会 歌舞伎会合同公演」は「修禪寺物語」「茶壺」「傾城反魂香 土佐将監閑居」。「第二十二回音の会」は「外記

猿」「石橋」「野崎村」。

九月の歌舞伎座は「九月大歌舞伎」。四部制で、第一部が梅玉の工藤、松緑の五郎、錦之助の十郎、魁春の大藏の虎による「寿曾我対面」、第二部が幸四郎の与右衛門、猿之助のかさねによる「かさね」、第三部が吉右衛門の濡髪長五郎、菊之助の南与兵衛、雀右衛門のお早、東蔵のお幸による「引窓」、第四部が玉三郎による「口上」、玉三郎の鶯の精による「驚娘」。「口上」では歌舞伎座の楽屋や舞台機構の映像を入れ、「驚娘」は、過去の映像を用いて構成した。

十月からは歌舞伎座だけではなく、国立劇場、名古屋・御園座でも歌舞伎公演の幕が開けられた。国立劇場、御園座でも客席は前後左右を開けて配置された。歌舞伎座は第一部が芝翫の左甚五郎、門之助のおとく、七之助の京人形の精による「京人形」、第二部が白鸚の濡髪長五郎、高麗蔵の吾妻、勘九郎の与五郎・放駒長吉による「角力場」、第三部が仁左衛門の梶原平三、孝太郎の精、彌十郎の大庭、歌六の六郎太夫による「石切梶原」、第四部が「映像×舞踊 特別公演」。玉三郎の「口上」と「楊貴妃」。

国立劇場は二部制で、大幹部らがあたり役に挑む一方で新作も発表された。第一部が梅玉の梶原源太、扇雀の千鳥、幸四郎の梶原平次、魁春の延寿による「源太勘当」、続く「幸希芝居明遊」(鈴木英一作)は、閉場中の芝居小屋の楽屋が舞台となる新作で、幸四郎らが芝居の名場面をユーモアたっぷりに見せた。第二部が菊五郎の宗五郎、時蔵のおはま、彦三郎の磯部主計之介による「魚屋宗五郎」、松緑のすっぱの九郎兵衛、坂東亀蔵の田舎者万兵衛、片岡亀蔵の目代による「太刀盗人」。

御園座は「錦秋御園座歌舞伎」。菊之助の清姫による「鐘ヶ岬」、解説「歌舞伎のみかた」、菊之助の狂言師右近後に親獅子の精、萬太郎・尾上右近の交互出演による狂言師左近後に仔獅子の精。

大阪松竹座は愛之助、今井翼、壱太郎、種之助、鴈治郎による「GOEMON抄」。

十一月からは歌舞伎座で桟敷席が復活し、八月から十月までは販売のなかった筋書も作られた。

歌舞伎座の第一部が猿之助の早替わりによる五変化舞踊の「蜘蛛の絲宿直斬」、第二部が菊五郎の山蔭右京、左團次玉の井による「身替座禅」、第三部が白鸚の一條大藏長成、芝翫の鬼次郎、壱太郎のお京、魁春の常盤御前による「一條大藏譚」、第四部が獅童の佐藤忠信・佐藤忠信実は源九郎狐、蒼玉の静御前、染五郎の源義経による「義経千本桜 川連法眼館」。

国立劇場の第一部は吉右衛門の平清盛・俊寛、雀右衛門の千鳥、菊之助の東屋・丹左衛門、又五郎の瀬尾、錦之助の成経による「平家女護島一俊寛一」。第二部は仁左衛門の六助、孝太郎のお園、東蔵のお幸による「毛谷村」、梅枝の「文売り」、鷹之資の悪玉、千之助の

善玉による「三社祭」。出演者のコロナウイルス感染により、第二部は二十二日から中止された。

博多座は「市川海老蔵特別公演」。巳之助の「流星」、海老蔵の弁慶、児太郎の義経、右團次の富樫による「勸進帳」。

国立小劇場では中村京蔵の自主公演「冬麗の会」が催され、京蔵が清姫の「豊後道成寺」、滝の白糸の「新編滝の白糸」が上演された。

十二月は歌舞伎座は第一部が愛之助と松也による四変化「弥生の花浅草祭」、第二部が七之助のおたか、中車の星野屋照蔵、猿弥の母お熊による落語の「星野屋」をもとにした「心中月夜星野屋」、第三部が勘九郎の又平、猿之助のおとくによる「傾城反魂香 土佐将監閑居」、第四部が玉三郎の岩長姫実は八岐大蛇、菊之助の素戔鳴尊、梅枝の稲田姫による「日本振袖始 大蛇退治」。玉三郎がコロナウイルス感染者の濃厚接触者に指定され、七日まで菊之助が岩長姫、彦三郎が素戔鳴尊を演じた。

国立劇場は第一部が時蔵のお嬢吉三、芝翫の和尚吉三、松緑のお坊吉三による「三人吉三巴白浪」、第二部が白鸚の河内山、梅玉の松江出雲守による「河内山」、福助らによる「鶴亀」、染五郎の獅子の精による「雪の石橋」。

南座は三部制の「吉例顔見世興行」。第一部が鷹之資の三番叟による「操り三番叟」、鴈治郎の又平、扇雀のおとくによる「傾城反魂香」、第二部が隼人・千之助の猩々、亀鶴の酒売りによる「寿二人猩々」、仁左衛門の熊谷直実、孝太郎の相模、歌六の弥陀六、秀太郎の藤の方による「熊谷陣屋」、第三部が尾上右近の太郎冠者、米吉の女大名による「末広がり」、幸四郎の伊左衛門、壱太郎の夕霧による「廓文章」。「熊谷陣屋」は、コロナウイルス感染関連で仁左衛門が七日からの出演となり、五日、六日は錦之助が熊谷を演じた。

尾上右近の自主公演が二日間、セルリアンタワー能楽堂で行われた。「藤娘」と新作の「隠〜ONU〜」を演じた。

十一月十二日に坂田藤十郎が八十八歳で亡くなった。

公演数が少ない中で、積極的に行われるようになったのが映像配信である。三月に予定されていた歌舞伎座と国立劇場の舞台収録映像が四月に無料配信されたのは先に記したが、その後、有料配信を目的とした作品が次々と発表された。口火を切ったのは幸四郎で、「図夢歌舞伎」の名で、六月末から五回に分け、自身が大星由良之助、猿之助が勘平などを勤める「忠臣蔵」を配信。「図夢歌舞伎」では十二月末に第二弾として幸四郎の弥次郎兵衛、猿之助の喜多八による新作の「弥次喜多」が配信された。七月は壱太郎と尾上右近が組んだ「ART歌舞伎」が配信された。また勘九郎と七之助

は七月に浅草公会堂で「猿若揃江戸賑 厄祓浅草祭」を無観客収録して配信、さらに九月には浅草寺の仮設舞台で「連獅子」を無観客で踊り、配信した。八月には吉右衛門が松貫四名で「一谷嫩軍記」をモチーフとした一人芝居「須磨浦」を能楽堂で収録して配信した。

今後も、映像配信は歌舞伎のもうひとつの形として続くことが予想される。

[商業演劇]

2020年の商業演劇

水落 潔

商業演劇の世界でコロナ騒動が始まったのは、2月26日に安倍首相が「多数の観客が集まる全国的なスポーツ、文化イベント」の開催自粛を要請してからだった。これを受けて国立劇場、国立博物館は初日の延期、休館を発表した。翌27日に松竹、東宝は傘下の劇場の公演中止を決定した。新橋演舞場の新派「八つ墓村」は昼の部で公演を中止し、カーテンコールで水谷八重子が「まだまだ芝居がしたいのですが、皆様の健康が第一です」と挨拶した。その日の夕方安倍首相は全国すべての小中高校に臨時休校を要請した。3月1日に東京芸術劇場館長で劇作家の野田秀樹が、演劇は観客があって初めて成立する芸術で、劇場閉鎖は「演劇の死」を意味しているという内容の意見書を公開した。5日には日本俳優連合の西田敏行理事長が「俳優は個人事業者であり、劇場閉鎖によって収入を絶たれた俳優が多く公的支援体制を調べて欲しい」と訴えた。この時点では休演は一時的な処置という雰囲気、宝塚大劇場は9日に感染予防の措置をとったうえで公演を再開したが、ネット上で非難が殺到したため12日に再び休演した。しかし、一部の小劇場は公演していて、私もいくつかの公演を観劇している。11日にWHO(世界保健機構)が状況を「パンデミック」(世界的流行)と発表して同日ブロードウェイ、翌日にパリ、16日にロンドンの劇場が一斉に閉鎖した。同じ日に日本芸能実演家団体協議会(通称「芸団協」、野村萬会長)が、安倍首相に対し経済支援を求める要望書を提出し、超党派の135人の国会議員で作っている「文化芸術振興議連」が動き出した。3月末から4月上旬は様々な情報が交錯して「文化芸術の火を消してはいけない」という声は盛んに聞かれたが、具体的な支援策はまったく出なかった。アメリカ、イギリス、ドイツが具体的な金額を明示して芸術家への支援を表明したのに対して、日本政府は自粛を求めるだけで補償についてはゼロ回答を続けた。その間、新型コロナに感染する人の数は増え続け4月16日に政府は全国に対して緊急非常宣言を発表し、5月6日までの不急不要の外出自粛を要請した。「文化芸術振興議連」は多くの芸術団体や個人から聞き取り調査をした結果を踏まえて「文化芸術支援策」と「文化芸術復興基盤構想」を纏めて内閣に提出した。それによると、3月17日の時点で音楽、演劇、演芸、古典芸能などの損失が、分かっただけで522億円、中止、延期した公演数は5600公演、最終的な損失は2000億円になると推計している。これらを受けて政府は5月26日の第二次補正予算で文化庁に「文化芸術活動への緊急総合支援パッケージ」として

560億円の予算を初めて計上した。芸術団体には1500万円、個人には20万円、小規模団体には150万円、フリーランスには20万円のコースを設け、収益力強化(動画配信や教育コンテンツの制作)に取り組む文化芸術団体に2500万円を支給する支援策であった。

7月11日にパルコ劇場が三谷幸喜作、演出「大地」で再開した。左右の席を空けた市松様様の客席で、この配置は以後歌舞伎座、国立劇場などでも行われた。8日に新宿のシアターモリエールで13人のクラスターが発生した。14日に、3～5月期の決算は前年同期に比べ東宝が最終利益98%減、松竹は売上げが68%減と発表した。8月1日歌舞伎座が5ヶ月ぶりに再開した。前に書いたように客席を半減し、4部制で各部一幕物の上演で幕間なし、終演後は総入れ替え制という条件の中での公演であった。一方、新橋演舞場、明治座などは休演を続けた。こんな状況の中でオンライン配信など、様々な試みが行われたが商業演劇には馴染まず、大劇場はただ事態が鎮静するのを待つばかりであった。多くの劇場が再開したのは9月以降になった。その後も三密を避けるため客席数を減少したり、劇場内での飲食を禁じたりと様々な制約が設けられた。商業演劇は基本的に大衆娯楽で、仲間が誘い合わせて観劇を楽しみ、幕間には食事をしながら会話するという性格を持っている。多くの大劇場は以前ほどではないにしても大小の団体客を持ち、それを営業基盤にしている。三密を避けるという要請は、団体客やグループ客を取れぬということで、この一年商業演劇は壊滅的な状態が続いた。この状態は年が明けても変わっていない。

コロナ禍以外にも多くの事柄があった。7年8ヶ月の長期政権を率いた安倍首相が持病の悪化を理由に退任、9月に菅義偉内閣が発足した。アメリカでは大統領選挙でトランプ氏が破れ、民主党のバイデン氏が次期大統領になることが決まった。EU離脱を巡るイギリスとEUの貿易交渉は年末に一応の妥協が成立したが混乱は続いている。欧米諸国と中国との対立は益々深刻化して、コロナ禍も加わり世界経済は大きな影響を受け、今後の推移が見えにくいまま越年した。国内では7月に九州を中心に豪雨災害が続いた。政治家の汚職、や不明瞭な金の動きが多数露れ、学術会議の任命拒否問題も含めて政治や権力のあり方が厳しく問われた一年になった。

個々の劇場の話題に入るが、コロナ禍で多くの公演が中止になった。新橋演舞場は1月が海老蔵を座頭とする歌舞伎公演、2月の前半は松竹新喜劇で二本立て。

最初は館直志作、米田亘演出「駕籠や捕物帳」でお殿さまと強盗が瓜二つというところから起こるまげ物喜劇、続いては山田洋次原作・脚本・演出、わかぎゑふ脚本・演出助手の「大阪の 家族はつらいよ」で、山田監督の同名の映画を舞台化した新派の舞台を、さらに大阪を舞台に置き換えた作品であった。大阪谷町の親子三所帯が住み一家が舞台で、老妻が誕生日に夫に離婚届を突き付けられたことから長男夫婦、次男を巻き込んだ大騒動が起こる。台詞を大阪弁に置き換えたことで、新喜劇らしい特色が出て面白い舞台に仕上がった。渋谷天外、高田次郎、藤山扇治郎、井上恵美子、曾我廼家寛太郎が劇団員に久本雅美が参加した。

2月後半は新派で横溝正史原作、齋藤雅文脚色、演出の「八つ墓村」。「犬神家の一族」に続く横溝作品の上演で、戦国時代の呪いが祟る連続殺人を描いた怪奇ロマン。水谷八重子、波乃久里子が事件の鍵を握る双子の老女、喜多村緑郎が探偵金田一耕助を演じた。関西ジャニーズjrの室龍太、一色采子、石倉三郎が参加した。ベテラン作家らしい壺を心得た脚本、演出で大衆的な娯楽作に仕上がったが、3月3日まで上演の予定がコロナ騒動で28日で打切った。以後9月までは休座した。中止された公演の名称を記しておく。3月前半の舟木一夫公演、1後半の齋藤雅文作、演出の「有頂天作家」、4月の歌舞伎、5月前半のOSKの「春の踊り」、後半の石川さゆりの歌芝居「あい」、6月の「熱海五郎一座」、7、8月の「滝沢歌舞伎 ZERO」、9月の舟木一夫公演である。10月に再開場してジャニーズ事務所の「虎者 NINJAPAN」を上演した。アクションを見せる娯楽劇だった。10月末から11月は森本薫作「女の一生」を上演した。作者が文学座の杉村春子に書き下ろした戯曲で、杉村と文学座の財産演目になっている。今回は定番になった戌井市郎の補綴台本を使い段田安則が演出した。主人公の布引けいを大竹しのぶが演じ、段田をはじめ高橋克実、風間杜夫、宮沢エマ、銀粉蝶らが共演した。大竹が16歳から55歳までのけいの人生を造形し、家を守るためすべてを捧げた女の一生を描きだした。けいを通して個人より家、家より国家を大切にした近代日本の歴史を表現した舞台になったことを評価したい。12月は藤山寛美没後三十周年記念の喜劇公演を5月の松竹座から引っ越して上演することになっていたが、コロナ禍の余波で中止になった。それに代わって新派が12、13、19日に新派朗読劇場と題して「鶴八鶴次郎」、「春色浅草ぐらし」、「遊女夕霧」、「七つの顔の銀次」、「女の決闘」、「夜叉ヶ池」を演じた。新派の劇団員のほか川中美幸、真琴つばさらが客演した。

新派は1月に三越劇場で中野実作、成瀬芳一演出「明日の幸福」を上演した。新派初のホームドラマとして初演し、以後人気狂言として上演を重ねてきた作品で、水谷八重子、田口守の老夫婦、波乃久里子、喜多村

緑郎の息子夫婦、客演の栗山航と春本由香の若夫婦という役役。手慣れた作品で好舞台に仕上がった。舞踊「神田祭」を併演した。三越劇場はコロナ禍で3月以降の公演をすべて中止し、6月の新派の「東京物語」、10月の「毒薬と老嬢」も取りやめになった。

東宝系も事情は同じである。帝劇は例年通り年間ミュージカル路線を貫いた。1月は前年から続演の「ジャニーズ・アイランド」、2、3月は恒例の「エンドレス・ショック」だったが、公演途中で休館し、5か月休館ののち8月の「ジャージー・ボーイズ」で再開した。しかし通常の公演ではなく、短時間の「コンサート」方式での上演になった。公演が中止された演目は3月の「ショック」、4月の「エリザベート」、5、6月の「ミス・サイゴン」、7月の「ジャージー・ボーイズ」である。本公演は10月の「ローマの休日」からで、11月は「ビューティフル」、12月はジャニーズ事務所の「ドリーム・ボーイズ」であった。

シアタークリエは1月にミュージカル「シャボン玉とんだ宇宙までとんだ」。2月の前半は太宰治の遺作「グッドバイ」で、未完に終わった原作をもとにケラリーノ・サンドロヴィッチが脚本、生瀬勝久が演出した。戦後、多くの愛人と別れるため、闇市で知り合った大食いの美女を妻に仕立てて、愛人のもとを歴訪する編集者の姿を綴ったコメディで。藤本直人とソニンが主人公の男女を演じ、真飛聖、長井短、生瀬勝久らが共演した。ケラらしい捻りの効いた作品で面白い舞台になった。2月後半はプレミアム音楽朗読劇だったが、途中で休館した。以後「リトル・ショップ・オブ・ホラーズ」「モダン・ミリー」などのミュージカルや劇作家の古川健を初登用した「アルキメデスの大戦」らが上演中止になった。本格的な公演は10月のニール・サイモン作、原田諒潤色・演出「おかしな二人」からになった。大雑把なオリブと潔癖症のフローレンスという対照的な性格の女二人が同居する。そんな二人の間に起こるいざちを、ゲーム仲間や同じアパートに住むスペイン人兄弟を絡めて描いたコメディで、主人公の二人を大地真央と花總まりが演じ、シルビア・グラブ、宮地雅子らが共演した。大地と花總のコメディエンヌの資質が発揮され好舞台に仕上がった。特に花總が達者な演技を見せた。最後は二人のショーで締め括った。11月はミュージカル「レント」。12月はテレビ作家の田淵久美子の脚本、山田和也の演出で「オトコ・フタリ」。有名な画家と彼に師事したいという謎めいた男に家政婦を絡めて描いた新作。山口祐一郎、浦井健治、保坂知寿が共演したが期待外れの凡作。

東宝製作の舞台はほかに2月に日生劇場で上演した井上ひさし作、藤田俊太郎演出「天保十二年のシェクスピア」があった。講談「天保水滸伝」に、シェイクスピアの作品の人物を重ね合わせて描いた作品で、高

橋一生、木場勝己、浦井健治、辻萬長、唯月ふうか、梅沢昌代が多彩なキャストが揃い面白い舞台になった。

明治座は1月が三山ひろし公演で「阪田三吉物語」と歌謡ショー、末に福田こうへいのコンサートが入った。2月は川中美幸公演。3月から休座が続き10月から再開した。中止になった公演は3月の「花形歌舞伎」、4月のミュージカル「チェザレ」、5月の「伍代夏子、藤あや子のコンサート」、6月の「梅沢劇団」、「志村けん一座」、「巖流島」、7月の「コロケ公演」などである。8、9月の「氷川きよし公演」から観客数を制限しながら再開した。10月前半は「細川かしとダチョウ倶楽部」の公演で「西遊記」。後半は秋元松代原作「おさんの恋」を、石丸さち子が上演台本にして演出した「恋、燃ゆる。」で、近松の浄瑠璃で知られる「おさん茂兵衛」の物語。登場人物は浄瑠璃と同じだが、茂兵衛はおさんを慕っていたもののプラトニックラブで、おさんは貞淑な女房。しかし夫永心は女遊びがやまず、不図した出会いから二人が結ばれるという悲恋劇に仕立てている。檀れいのおさん、中村橋之助の茂兵衛、西村まさ彦の永心で、高畑淳子、石倉三郎らが共演したが、台本演出に精彩がなく、出演者の演技も平板で期待外れの舞台になった。12月は明治座・東宝・ヴィレッジに所属する同じ歳の三人のプロデューサー「三銃士」が企画した「両国花錦闘士(おしやれりきし)」。岡野玲子の同名の漫画を青木豪が脚本を書き演出した舞台で、ソップ型で美形の昇龍とアンコ型の雪乃童というライバルを主人公に、女性の相撲記者、芸能事務所的女社長などを絡めて描いた青春物語。当初昇龍に出演予定の伊藤健太郎がひき逃げ事件で降板したためジャニーズ事務所の原嘉孝が主演し、大鶴佐助、大原桜子、りょうなどが共演した。若い観客向きにダンスやショーを駆使したバラエティ仕立てに仕立てていたが、舞台の水準は低かった。明治座の後、2021年一月に新歌舞伎座、博多座でも上演する予定である。

前進座は1月の南座公演の後「ひとごころし」や「牛若丸」で全国巡演をしていたが、コロナ禍で5月の国立劇場公演は中止になり、9月文楽劇場の「東海道四谷怪談」から劇場公演を再開した。10月には浅草公会堂ほかで朝井まかて原作、朱海青脚色、鶴山仁演出「残り香」を上演した。江戸城明け渡しの前日、大奥に居残った五人の奥女中の物語だった。

渋谷パルコの建替えに伴い、16年8月から休館していたパルコ劇場が1月に新築完成して再開した。劇場は渋谷パルコの7～9階に設置され、旧劇場の1.6倍に当たる636席。自社が制作する公演を上演していく。こけら落とし公演は24日初日の「志の輔らくご」で、3月13日からは渡辺謙主演の「ピサロ」だったが、コロナ禍で初日を延期、さらに二回の休演の後、4月15日に中止を決めた。続く「佐渡島他吉の生涯」は中止し

た。第三弾の三谷幸喜3作品連続公演は、第一作の「大地」の脚本装置に手を加えて7月1日初日を10日遅らせて11日に開幕した。第二作「ショーガール」、第三作は「其礼成心中」だった。

エイベックス・エンターテインメントが12月にシアターコクーンでアガサ・クリスティー作、ケン・ルでデイング脚色、河原雅彦演出「オリエント急行殺人事件」を上演した。椎名桔平の探偵ボアロが列車内の殺人事件を解決するお馴染みの物語で、松井玲奈、室龍太、マルシア、高橋恵子、本仮屋ユイカらが出演した娯楽作だった。

御園座は1月が短期の坂東玉三郎舞踊公演の後、梅沢富美男と研ナオコの公演で「おかしなおかしな男の花道」と歌謡ショー、舞踊絵巻、月の最後には海老蔵一座が公演した。2月は宝塚歌劇月組が公演したが、月末から休座した。3月の吉幾三、4月の「ナルト」、「モダン・ミリー」、5月の「コメディ祭」、6月の「エリザベート」など7月までの全公演は中止になった。8月の「よしもと喜劇」で再開したが、後半の「ピーターパン」は中止した。10月は顔見世、11月の前半は「滝沢歌舞伎 ZERO」で満員の入り、後半はミュージカル「生きる」や梅沢劇団、12月は「ローマの休日」や「よしもとは喜劇」など。

松竹座1月が歌舞伎、2月は桂米朝五年祭と銘打って廓正子原作、堤泰之脚本・演出「なにわ夫婦八景」を上演した。上方落語の再興に一生を賭けた米朝の歩みと、それを支えた絹子夫人の姿を、息子の米團治や弟子たちとの暮らしを交えて描いた舞台で、寛利夫と真琴つばさが夫妻、内博貴が米團治を演じ、桂ざこば、三林京子、曾我郷家文童らが共演した。3月から休座し「ジャニーズ事務所公演」、「有頂天作家」、「OSK春の踊り」、「藤山寛美没後30周年喜劇公演」、新派「ハッ墓村」は中止になった。8月のジャニーズ事務所の「ドリーム・アイランド」から再開したが、11月の松竹新喜劇をはじめ松竹制作の長期公演はその後中止になった。代わって9、10月に「ステージ体験ツアー」を行った。

新歌舞伎座は1月は「五木ひろしと坂本冬美」で「杵掛時次郎」と「歌謡ショー」、2月の前半はクリエから引越したミュージカル「しゃぼん玉飛んだ」、後半は「天童よしみ」が公演した。しかし3月からは長期に亘って休座した。中止になったのは「前川清と藤山直美」公演、「島津亜矢公演」、「リトル・ショップ・オブ・ホラーズ」、「モダン・ミリー」、「新・陽だまりの樹」、「山内恵公公演」、「水森かおり公演」、「コロケ公演」などで、10月に再開した。しかし当初予定していた10月の「福田こうへい公演」、11月の「市川由紀乃公演」、12月の「中村美津子公演」は中止になり、短期間の歌手公演を続ける状況になった。長期公演は11

月19～29日の「氷川きよし公演」だけであった。

博多座は1月が「ダンス・オブ・ヴァンパイア」、松尾スズキ作「キレイ」、「天使にラブソング」、2月にスーパー歌舞伎Ⅱ「オグリ」、「海老蔵公演」で、3月から休座した。中止になったのは3月の「デスノート」、4月の「劇団新感線」、5月の「五木ひろし」、6月の「歌舞伎」、7月の「エリザベート」、8月の「ミス・サイゴン」で、10月の文楽公演から再開した。11月は海老蔵らの歌舞伎、12月は例年通りに市民に貸し出した。

今年も多くの演劇人が亡くなった。新型コロナに感染で志村けん(3月、70歳)、岡江久美子(4月、63歳)が亡くなった。俳優では坂口芳貞(2月、80歳)安田正利(同、87歳)、宮城まり子(3月、93歳)、志賀廣太郎(4月、71歳)、金内喜久夫(同、87歳)、久米明(同、96歳)、三浦春馬(7月、30歳)、立石涼子(8月、68歳)、梅野泰靖(同、87歳)、藤木孝(9月、82歳)、坂田藤十郎(11月、88歳)、小松政夫(12月、78歳)、浅香光代(同、92歳)、劇作家の別役実(3月、82歳)、山崎正和(8月、86歳)、藤田敏雄(9月、92歳)、文楽の豊竹嶋太夫(8月、88歳)、舞踊家の花柳壽應(9月、89歳)、鳴物の堅田喜三久(12月、85歳)の各氏である。謹んでご冥福を祈りたい。

[現代演劇]

新型コロナウイルスに翻弄された1年

林 尚之

新型コロナウイルスに翻弄された1年だった。2月26日、安倍晋三首相(当時)が突然、イベントの自粛を要請した。

演劇界は素早く対応した。東宝、松竹の大手興行会社、劇団四季などは26日から「2週間程度」の公演中止を決めた。ホリプロの「ねじまき鳥クロニクル」、彩の国さいたま芸術劇場で上演中だった「ヘンリー八世」は千秋楽を待たずに公演を終了。世田谷パブリックシアターの倉持裕作・演出「お勢、断行」はゲネプロを行いながら、28日の初日を前に公演を中止した。

コロナ感染者が増える中、自粛延長を要請された。中止が相次ぐ中、公演の続行を決めた劇団は、入念な感染防止対策で対応した。俳優座は「マクベスの悲劇」の初日を遅らせ、客席は100席から70席に減らし、入場時は検温、消毒液による手指消毒を徹底した。

4月7日に「緊急事態宣言」が出され、都内の劇場は一時的な閉鎖状態になった。大竹しのぶ主演、ケラリーノ・サンドロヴィッチ演出「桜の園」、自らも感染した宮藤官九郎作・演出「もうがまんできない」も中止となった。新国立劇場では全キャストがフルオーディションの宮本研作「反応工程」、長澤まさみの一人芝居「ガールズ&ボーイズ」、神奈川芸術劇場でも白井晃演出「アーリントン」、岡田利規作・演出「未練の幽霊と怪物」も中止となった。パルコ劇場もオープニングシリーズ第一弾「ピサロ」が公演途中で中止となり、続く森新太郎演出、佐々木蔵之介主演「佐渡島他吉の生涯」も中止した。劇団でも、文学座が「熱海殺人事件」「昭和虞美人草」、民藝は「どん底 1947・東京」「想い出のチェーホフ」を翌年に延期。新劇6劇団による新劇交流プロジェクト「美しきものの伝説」も中止となった。全国で中止となった公演は800を超えた。

演劇の再開は、オンライン・リモート演劇から始まった。Zoomなどを使い、三谷幸喜作「12人の優しい日本人」は初演メンバーが結集したりモート朗読劇として配信された。6月にいち早く再開した本多劇場は、日替わりで一人芝居「DISTANCE」を無観客で上演し配信した。

本格的な再開は、パルコ劇場の三谷幸喜作・演出「大地」(主演大泉洋)だった。初日を延期し、客席も密を避けるため前後左右を空けて半減したため、前売りチケットを払い戻した上で再販売。減収分を補うため、公演中としては異例のライブ配信を行った。出演者同士の密を避ける「ソーシャル ディスタンシングヴァージョン」と銘打ち、初日の本番前には三谷が前説として舞台上に現れ、日本の新劇の先駆者である築

地小劇場が銅鑼を鳴らして開演したことを踏まえ、銅鑼の音を響かせて幕が上がった。独裁者によって演じることを禁じられた架空の国を舞台に、強制収容された俳優たちの演じることへの渴望、プライドが交錯し、演劇愛が詰まった舞台だった。

まだ新型コロナが話題にもならなかった1月に、ここ数年、魅力的な作品を次々と発表する横山拓也の新作「雉はじめて鳴く」が俳優座で上演された。演出は真鍋卓嗣で、2年前の「首のないカマキリ」に続くコンビ。高校を舞台に、家庭に問題のある生徒と、彼に寄り添いサポートする女性教師の関係を軸に、事なかれ主義の校長、モンスターペアレンツの母親が登場し、学校の現場が直面する問題を緻密な会話で描いた。横山は入念な取材からリアルな会話を紡ぎ、真鍋も葛藤する人たちの心情を掬い上げる丁寧な演出が際立った。真鍋は同作と名取事務所公演「少年Bが住む家」の演出で、紀伊国屋演劇賞を受賞した。横山は主宰するiaku公演「The last night recipe」も、妻の突然の死で終わりを迎えた夫婦を通して、生きることを意味を問いかける秀作を上演した。

ケラリーノ・サンドロヴィッチは緒川たまきと演劇ユニット「ケムリ研究室」を立ち上げ、第一回公演となった作・演出「ベイジルトウンの女神」は、俗世間を知らないワンマン女性社長が、ベイジルトウンと呼ばれる貧民街で暮らすことから起こる騒動を描くファンタジーな作品。

前川知大は主宰するイクウメ公演「外の道」を中止し、11月にパルコ劇場で作・演出した「迷子の時間」(亀梨和也)を上演。神隠し事件をめぐるミステリー仕立ての作品だった。

鄭義信が作・演出した「泣くロミオと怒るジュリエット」(桐山照史)は、「ロミオとジュリエット」の大阪版で、全員関西弁をしゃべり、ジュリエット役の柄本時生などオールメールという異色作。

JACROWの中村ノブアキは、田中角栄元首相の足跡を描く「闇将軍シリーズ」の3作品「夕闇、山を越える」「宵闇、街に登る」「常闇、世を照らす」を一挙上演。ロッキード事件で有罪判決を受けた後も政界を操る姿を描いた完結編「常闇」で紀伊国屋演劇賞を受賞した。

トラッシュマスターズの中津留章仁の作・演出「対岸の絢爛」は、IR(統合型リゾート)誘致をめぐる、国家が権力と金で私的なものをいつも蔑ろにしてきた歴史を焙り出た。

詩森ろばは、劇団銅鑼で日本初の女性写真家と夫をモデルにした「蝙蝠傘と南瓜」、流山児★事務所公演で

はアイヌをめぐる人間ドラマ「コタン虐殺」を作・演出した。

新国立劇場は、鶴山仁演出で09年に始まったシェークスピア歴史劇シリーズが「リチャード二世」でラストを飾った。「ヘンリー六世」三部作、「リチャード三世」「ヘンリー四世」「ヘンリー五世」と続き、岡本健一、浦井健治、中嶋朋子ら同じ出演者が同一の役を通して演じて上演を続けていたので、シリーズ全作品を演出した鶴山は毎日芸術賞、リチャード二世を演じた岡本は紀伊国屋演劇賞を受賞した。長塚圭史作・演出「イヌビト〜犬人〜」(松たか子)は、「こどもも大人も楽しめる」企画で、感染すると犬のようになる「イヌビト病」が蔓延する町に引っ越してきた一家をめぐる寓話劇。同シリーズではミヒヤエル・エンデ作、小山ゆうな演出「願いがかなうぐつぐつカクテル」(北村有起哉)、ピーターパンの誕生秘話を描いた、トニー賞作品のリック・エリス作「ピーター&ザ・スターキッカー」(入野自由)がノゾエ征爾演出で上演された。

東京芸術劇場では、「福島三部作」で鶴屋南北戯曲賞と岸田國士戯曲賞をダブル受賞した谷賢一の演出で、佐藤隆太の一人芝居「エブリ・プリリアント・シング」が上演された。ダンカン・マクミランとジョニー・ドナヒューの共同執筆で、観客参加型の舞台。開演前に佐藤が客席に登場し、数字や「アイスクリーム」などの言葉が書かれたカードを渡し、劇中、数字と呼ばれるとカードを読み上げる仕掛けが面白い。主人公が幸福とは言えない境遇の中で、好きなものを一つずつ数え上げること耐えてきた半生を語る。観客も一緒にになって、人生の楽しみ方を見つめる幸福感に包まれる舞台だった。「カノン」、木ノ下歌舞伎「三人吉三」を中止した後の再開第一弾で野田秀樹作・演出「赤鬼」が、将来の演劇を担う演劇人の育成を目的に設立された東京演劇道場の道場生によって上演された。同作は1996年初演で、本来は4人芝居だが、今回は17人出演で再構成し、4チームでの上演。ある村に赤い顔の異形の男が漂着し、村人たちは男を「赤鬼」として恐怖を抱き、排斥しようとする。男は唯一心を通わせた女に救い出され、船で逃げ出すが、最後は悲劇が待っていた。差別、偏見、不寛容という、今を取り巻くキーワードが見る者に突き付けられ、4チームごとに演出も異なり、多様性を感じる舞台だった。シェークスピア作品を野田秀樹が潤色した「真夏の夜の夢」を、野田と親交のあるルーマニアのシルビウ・ブルカレーテ演出で上演した。東京芸術劇場30周年を記念した公演で、ブルカレーテ独特のファンタジックで視覚的な舞台だった。主演の鈴木杏は同作と一人芝居「殺意」の演技で、読売演劇大賞・最優秀女優賞と紀伊国屋演劇賞を受賞した。

神奈川芸術劇場ではブレヒト作、白井晃演出、草薙

剛主演「アルトゥロ・ウイの興隆」を上演した。ナチス・ドイツのもとから米国に亡命したブレヒトが、ヒトラーが独裁者として権力を握る過程をシカゴのギャングの世界に置き換え、草薙は緩急の切り替えが巧みだった。谷賢一作・演出「人類史」(東出昌大)は猿人類から人間への進化を美しい振付で見せ、今につながる過去の疫病下の排他性を浮かび上がらせた。瀬戸山美咲作、杉原邦生演出「オレステスとビュラデス」はギリシア悲劇に登場する2人の青年のその後を描いた。

世田谷パブリックシアターでは、シラー作、森新太郎演出「メアリ・スチュアート」(長谷川京子)。スコットランド女王メアリとイングランド女王エリザベス一世の対立を軸に、幽閉されても女王の誇りを毅然と貫くメアリ、政敵メアリの処刑に思い悩むエリザベス、2人の女王の間で右往左往する貴族たちの姿が描かれ、スケール感ある舞台になった。三好十郎作、栗山民也演出、鈴木杏主演の一人芝居「殺意 ストリップショウ」は鈴木杏の演技が「旺春。2時間しやべりまくり、ほとぼしる熱量で演じきった。瀬戸山美咲演出「現代能楽集X・幸福論」(瀬谷じゅん)は瀬戸山作「道成寺」、長田育恵作「隅田川」の2本立て。「道成寺」はエリート志向の家庭の歪みが悲劇を招き、「隅田川」は3人の女性の母と子の物語を3様に描いてカタルシスがある。バーナード・ポメランス作、森新太郎演出「エレファント・マン」(小瀧望)は、病による醜い容姿のメリックを主人公に、誠実に生きた姿が清々しい余韻を残した。

座・高円寺ではレパートリー公演としてエドワード・ポンド作、佐藤信演出「男たちの中で」を再演。巨大軍需企業を舞台に買収をめぐる男たちの暗闘を描いた。

彩の国さいたま芸術劇場では、公演途中で中止したシェークスピアシリーズ第35弾の吉田鋼太郎演出「ヘンリー八世」(阿部寛)は絶対的な権力者ヘンリー八世のもとで暗躍する貴族たちの生者必滅の興亡劇。同シリーズ第36弾の吉田鋼太郎演出、小栗旬主演「ジョン王」は中止となった。子供から大人まで楽しめる藤田貴大作・演出「かがみ まど とびら」、さいたまネクスト・シアターのリーディング公演としてイタリアの劇作家ピランデッロ作、小川絵梨子演出「作者を探す六人の登場人物」を上演した。

新装開場したパルコ劇場は、オープニングシリーズでピーター・シェーファー作、ウィル・タケット演出「ピサロ」(渡辺謙)を上演し、侵略する將軍と、インカ帝国の王との対決に見応えがあった。長田育恵作、栗山民也演出「ゲルニカ」(上白石萌歌)はスペイン内戦下の無差別爆撃で犠牲となった人々の悲劇を通して命の重さを今に問いかけた。宮藤官九郎作、河原雅彦演出「獣道一直線!!!」(池谷のぶえ)は悪女に翻弄される男

たちの物語。映画をもとに谷賢一の翻案・脚本、宮本亜門演出「チョコレートドーナツ」は、東山紀之の女装ぶりが圧巻。

シアターコクーンでは、松尾スズキ作「母を逃がす」、赤堀雅秋作・演出「パラダイス」が中止となったほか、海外からの入国が困難となったため、ロベール・ルパージュ構成・演出「HIROSHIMA 太田川七つの流れ」、英国人演出家フィリップ・ブリーンが演出予定だった、宮沢りえ主演「アンナ・カレーニナ」を中止した。陪審員たちが白熱した議論を交わすレジナルド・ローズ作「十二人の怒れる男たち」(堤真一)はリンゼイ・ボズナーがリモートで英国から演出して上演された。

倉橋健児で知られるアーサー・ミラーの名作「みんな我が子」が新訳で続けて上演された。俳優座劇場プロデュースの水谷八重也、桐山知也演出「彼らもまた、わが息子」(石田圭祐)、詩森ろは翻訳・演出のserial number公演「All My Sons」(大谷亮介)で、幸せそうに見えた家庭が、隠された秘密の暴露で崩壊。保身に走る父親と、正義を掲げる息子との対立が、息詰まる会話で浮き彫りになった。

文学座はアトリエ70周年記念公演として創立者の1人の岸田國土作「歳月」「動員挿話」を上演した。西本由香演出「歳月」は戦前の東京・山の手一家の17年間の変遷を描き、所奏演出「動員挿話」は日露戦争の出征をめぐる夫婦の思いの違いが悲劇を招く。鄭義信作、松本祐子演出「五十四の瞳」(松岡依都美)は瀬戸内海の小島にあった朝鮮人学校を舞台に、教師や生徒、親たちの物語。芸術祭優秀賞を受賞したほか、松岡は同作と「きらめく星座」の演技で紀伊国屋演劇賞を受賞した。ドイツの劇作家アンネ・レッパ作、生田みゆき演出「ガールズ・イン・クライシス」は、自律した人生を求める女性を主人公にした社会風刺劇。

劇団民芸が2月に上演したナガイヒデミ作、兒玉庸策演出「白い花」は、昭和40年代の瀬戸内海の小きな村を舞台に、2人の姉妹の心の緩を丁寧に描いた。トニー賞作品のクリストファー・デュラング作「ワーニャ、ソーニャ、マーシャ、と、スパイク」を丹野郁弓演出、檜山文枝主演で上演。映画スターの妹の仕送りに頼る初老の兄と養女のもとに妹が突然訪問することで、中高年の生きづらさが浮き彫りになる。こまつ座との合同公演の井上ひさし作、丹野郁弓演出「ある八重子物語」は、水谷八重子に心酔する人々を通して、戦前、戦中、戦後の庶民の姿が投影された。

俳優座は「雉はじめて鳴く」で幕を開け、コロナ禍の中で森一演出「マクベスの悲劇」(斎藤淳)を上演。狭い舞台空間の中、マクベスと夫人の夫婦愛に焦点を当てた演出だった。サム・シェパード作、真鍋卓嗣演出「心の嘘」は歪んだ父権社会に染まる家族の衝突を描き、

古川健作、川口啓史演出「火の殉難」(河野正明)は二・二六事件の犠牲になった高橋是清の半生を描いた評伝劇。

青年座は宮本研作、伊藤大演出「からゆきさん」で幕を開け、松本哲也作、磯村純演出「ありがとサンキュー!」(増子倭文江)は大正、昭和、平成を敬虔なクリスチャンとして生きた女性の半生を描いた。宮本研作、斎藤理恵子演出「ブルーストックキングの女たち」は平塚らいてうが創刊した女性だけの文芸誌「青踏」に集まった新しい女たちの群像劇。野木萌葱作「ズベズダ〜荒野より宙へ〜」は延期した。

青年劇場は、いずみ凜作「水曜日、ゆらゆるりん」を延期。韓国のイ・ジョンミョンの小説を原作にシライ・ケイタ脚本・演出の「星をかすめる風」は、27歳の若さで獄中死した国民的詩人尹東柱をめぐる愛と死の物語。

文化座は三好十郎作「炎の人」を、鶴山仁演出、藤原章寛主演で半世紀ぶりに上演。藤原ゴッホには圧倒的な存在感があった。金城一紀原作、斎藤祐一脚本、田村孝裕演出「フライ、ダディー、フライ」は、普通のサラリーマンが愛する娘のために一念発起してリベンジする痛快エンターテインメント劇。

演劇集団円の内藤裕子作・演出「光射ス森」は、森林が見棄てられ荒廃していく中、森を守ろうとする家族の物語。中屋敷法仁演出「ジュリアス・シーザー」は延期となった。

劇団昂は、「ブカブカ漂流記」「堰」を延期し、ダニエル・キイス作、菊池准演出「アルジャーノンに花束を」は主要なキャストが若返っての上演だった。

劇団チョコレートケーキは、古川健作、日澤雄介演出「無畏」。南京事件の責任者として東京裁判で死刑となった陸軍大将松井石根を主人公に、部下の暴走を止められず虐殺を招いた責任と後悔を、弁護人の追求を絡めながら描いた骨太の人間ドラマ。古川は「火の殉難」「沖縄世」のほか、キュリー夫人の半生を描いた「愛する母、マリの肖像」など充実していた。

劇団浅敷童子は、すみだパークスタジオの新劇場お披露目公演としてサジキドウジ作、東憲司演出「花トナレ」を上演。100年前の九州の山里が舞台で、いっつもながらに手作りの舞台美術は圧巻。赤い彼岸花が舞台を埋め尽くした。

創立70周年を迎えたテアトル・エコーは、田村孝裕作・演出「ママごと」、岡本眞作「夏宵漫百鬼夜行」を中止した。

ホリプロは村上春樹の人気小説をもとに、イスラエルの奇才インバル・ビントが演出・美術・振付、藤田貴大が共同演出と脚本を手掛けた「ねじまき鳥クロニクル」(成河、渡辺大知)を上演。芝居、コンテンポラリーダンス、音楽が融合した独創的な舞台だった。松

井周作、柄本明演出「てにあまる」(藤原竜也)は、歪な父子の関係をサスペンス風に抉り出した。

シス・カンパニーはピーター・シェーファー作「あなたの目」「わたしの耳」を連続上演した。ともに出演者は3人だけで、寺十吾演出「あなたの目」(小林聡美)は妻の不貞を疑う夫と探偵の駆け引きが面白く、マギー演出「わたしの耳」(ウエンツ瑛士)は内気な青年が目ぼれした女性を自宅に招いて起こる混乱を描いた。ニール・サイモン作、三谷幸喜上演台本・演出「23階の笑い」(瀬戸康史)は、1950年代の米国のテレビ業界を舞台に、笑いにかける男たちの泣き笑いを描いた喜劇。

井上ひさし作品を上演するこまつ座は栗山民也演出「きらめく星座」(松岡依都美)を上演。1985年の初演から8回目の再演。戦前の浅草のレコード店を舞台に、洋楽を愛する一家や下宿人の生活に戦争の影がしのびこみ、大好きな「私の青空」も敵性音楽として禁止される。普通に暮らしていた庶民が「同調圧力」で息苦しい生活に追いやられる姿は、コロナ禍で日常が規制される「今」につながっている。太宰治を主人公にした鶴山仁演出「人間合格」(青柳翔)は、不思議な友情でつながった3人の交流から太宰の青春を浮き彫りにした作品。栗山民也演出「私はだれでしょう」(朝海ひかる)は、戦後の放送局を舞台にした自分探しの物語。

名取事務所はパレスチナ作品「帽子と預言者」「鳥が鳴き止む時」を生田みゆき演出で上演。「帽子」は空から落ちた謎の物体を殺した罪に問われた男を裁く法廷を舞台に、機能不全となった社会ルールの絶望感をポップな演出でみせた。「鳥が鳴き止む時」はヨルダン川西岸にイスラエル軍が侵攻した日々を、弁護士的主人公が語る一人芝居。10月には現代韓国演劇2作品として、イ・ホラム作、真鍋卓嗣演出「少年Bが住む家」とキム・ミンジョン作、シライ・ケイタ演出「獣の時間」を上演。「少年」は友人を殺した息子を迎える家族の葛藤を描き、「獣」は浮浪児の保護施設を舞台にした作品。「少年B」は芸術祭優秀賞を受賞した。

加藤健一事務所はニール・サイモン作「サンシャイン・ボーイズ」を延期し、11月にデイヴィッド・ヘイグ作、鶴山仁演出「プレッシャー〜ノルマンディーの空」を上演。連合軍のノルマンディー上陸作戦をめぐり、上陸時の天候の判断を求められた気象学者の苦闘を描いた。

トム・プロジェクトによる古川健作、小笠原響演出「沖縄世 うちなーゆ」(下条アトム)は、実在の沖縄復帰運動のリーダーをモデルに、沖縄の過去、現在を描いた。東憲司作・演出「砦」(村井国夫)は村を守るためにダム建設反対に生涯をかけた男と妻の半生を追った作品。

シーエィティープロデュースは、老境に入った夫婦

を主人公にしたアーネスト・トンプソン作、鶴山仁演出「黄昏」(高橋恵子)、愛を求めながら闇に生きる4人の男の姿を赤裸々に描いたシライ・ケイタ脚本、千葉哲也演出「birth」などを上演した。

オフィス・コトローネは、雪山に命を懸けた登山家を主人公にした大竹野正則作「山の声」を綿貫凜演出で上演した。

劇作家の別役実さんが82歳で亡くなった。日本に不条理演劇を定着させ、戯曲数は144本と、日本一多作な劇作家だった。カフカやベケットに影響を受けて、不条理劇を書き始め、62年の「象」で注目された。68年に「マッチ売りの少女」「赤い鳥の居る風景」で岸田国士戯曲賞、70年に「街と飛行船」「不思議の国のアリス」で紀伊国屋演劇賞、「ジョバンニの父の旅」で芸術選奨文部大臣賞、70歳の時に「やってきたゴドー」で鶴屋南北戯曲賞、紀伊国屋演劇賞を受賞。毎年のように新作を発表する息の長い劇作家だった。2015年には「別役実フェスティバル」が開催され、18団体が参加し、1年3か月にわたって別役作品が上演された。18年「ああ、それなのに、それなのに」が最後の戯曲となった。20年も燐光群が坂手洋二演出で「天神さまのほそみち」を上演。正しいはずの主張がいつの間にか捻じ曲げられる理不尽さは、コロナ禍で不条理なことがまかり通る今の歪さに重なる舞台。渡辺えり演出「消えなさいローラ」は、テネシー・ウィリアムズの名作「ガラスの動物園」の後日談といえる作品で、家を出た弟トムの帰りを待つローラを主人公に、リリカルな切なさが漂う作品だった。

[ミュージカル]

2020年のミュージカル—活性化した下半期

横溝幸子

2020年は大型ミュージカルが次々上演される筈であった。来日公演も「ドリームガールズ」を皮切りに「RENT」「雨に唄えば」など人気演目の上演が予定されていた。それが目に見えぬ新型コロナウイルスに翻弄され、劇場が閉鎖されるとはだれが予想しただろうか。政府より2月26日から大規模イベントの自粛要請、4月7日の緊急事態宣言による劇場閉鎖で公演中の舞台は中断された。7月頃から半分の客席で劇場が再開されたが、ミュージカルに関しては下半期は活況の姿を取り戻した。

「シャボン玉」で幸せ気分

東宝が井上芳雄で上演した「シャボン玉とんだ宇宙までとんだ」(1月7日～2月2日 シアタークリエ、2月7日～9日 福岡市民会館、2月12日～15日 大阪新歌舞伎座)は、1988年の音楽座旗揚げ公演で初演された作品である。作曲家志望の悠介(井上芳雄)とスリの佳代(咲妃みゆ)の運命的な出会いと時空を超えて愛を貫くファンタジーな物語。音楽座出身の土居裕子、畠中洋、吉野圭吾、濱田めぐみも出演し、懐しの顔ぶれを見ながら正月から何となく幸せ気分を味わった。

東宝とホリプロが3年ぶり再演の韓国ミュージカル「フランクシュタイン」(ワン・ヨンボム脚本・作詞、イ・ソンジュン音楽、板垣恭一潤色・演出)は、“生命の創造”と“愛と友情”をテーマにした衝撃的な物語だが、テーマが暗い。科学者のビクター・フランクシュタインは中川晃教と柿澤勇人のWキャスト。怪物として蘇生するアンリ・デュブレは加藤和樹と小西遼生(1月8日～30日 日生劇場、2月14日～16日 愛知県立芸術劇場、2月20日～24日 梅田芸術劇場)。さらにホリプロは「DEATH NOTE」(アイヴァン・メンチェル脚本、ジャック・マーフィー歌詞、フランク・ワイルドホーン音楽、栗山民也演出)も再演した(1月20日～2月9日 東京建物Brillia HALL)。

梅田芸術劇場制作の「CHESS」(ティム・ライス原案・作詞、ベニー・アンダーソン ユーレン・ウルヴァース作曲、ニック・ウィンストン演出・振付)は、5年ぶりの再演だが、今回は1986年ロンドン初演台本を用いた新演出版で、日英キャスト共演の豪華版。冷戦時代を背景にチェスの世界選手権をめぐるソビエト国家を背負って出場したアナトリー(ラミン・カリムルー)、アメリカ人の天才チェスプレイヤーフレディ(ルーク・ウォルシュ)と恋人でセコンドをつとめるフローレンス(サマンサ・パークス)。審判のアービター(佐藤隆紀)のもと息づまる人生ゲームが始まる

(1月25日～28日 梅田芸術劇場、2月1日～19日 東京国際フォーラム ホールC)。

来日公演の先陣を切った「ドリームガールズ」(1月29日～2月16日 東急シアターオーブ)は、マイケル・ベネットの遺作となったブロードウェイ・ミュージカル。華やかなショービジネスの世界で活躍する女性ボーカルグループの栄光と挫折を描いた作品。4度目の来日公演だが、オーディションで選ばれた若手たちでも声量が凄い。結局、新型コロナウイルスの影響で来日公演は「ドリームガールズ」のみに残ったのが残念である。

相次ぐ公演中止の憂き目

2月26日の自粛要請が2週間、3月10日にさらに10日間の延長要請が出て、そのたびに劇場側は対策に振り回された。影響を受けた主要な舞台を挙げると堂本光一主演「Endless SHOCK」(2月4日～3月31日 帝劇)をはじめ再演作品では、安蘭けい・松下優也、濱田めぐみ・平方元基Wキャストの「サンセット大通り」(3月14日～29日 東京国際フォーラム ホールC)、「リトル・ショップ・オブ・ホラーズ」(3月13日～4月1日 シアタークリエ)。初演作品の「アナスタシア」(テレンス・マクナリー脚本、リン・アレックス作詞、ステファン・フラハティ音楽、ダルコ・トレスニャク演出)は、詐欺師のディミトリ(海宝直人・相葉裕樹・内海啓貴)が、行方不明のニコライ皇帝の末娘アナスタシアそっくりの少女アーニャ(葵わかな・木下晴香)をアナスタシアに仕立てバリーにいる皇太后(麻実れい)のもとに連れてゆく。人気アニメ映画のミュージカル化で日本初上陸と前評判が高かった舞台である(3月1日～28日 東急シアターオーブ、4月6日～18日 梅田芸術劇場)。

アンドリュー・ロイド＝ウェバーとジム・スタインマンがタッグを組んだ「ホイッスル・ダウン・ザ・wind～汚れなき瞳」は、脱獄した一人の男(ザ・マン)が納屋に身を潜めていると彼を見つけた少女スワロー(生田絵梨花)は、イエス・キリストの生まれ変わりだと信じ込む。ザ・マンを主演したのが三浦春馬だった。舞台に打ち込んでいる姿にミュージカル俳優としての大きな期待が寄せられたが、7月18日に首吊り自殺をしたため結果的に最後の舞台になってしまったのが惜しまれる(3月7日～29日 日生劇場)。

完全に中止になった作品は、帝劇が花總まり・愛希れいかの「エリザベート」(4月9日～5月4日)、市村正親・駒田一らの「ミス・サイゴン」(5月23日～6月28

日)。中川晃教は7月の「ジャージー・ボーイズ」の前に惣領冬実の歴史大河コミック「チェザレ」のミュージカル化(荻田浩一脚本、島健音楽、小山ゆうな演出)で主演(4月13日～5月11日 明治座)予定でたて続けに中止の憂き目にあった。シアタークリエは朝夏まなと主演「モダン・ミリー」(4月7日～26日)、日生劇場はHey! Say! JUMPの藪宏太主演「ジョセフ・アンド・アメージング・テクニカラー・ドリームコート」(4月7日～29日)、小池修一郎演出、京大本我主演「ニュージーズ」(5月8日～30日)、東急シアターオーブは柚希礼音主演「ボディガード」(4月3日～19日)。東宝が渡辺直美主演で企画した「ヘアスプレー」(6月14日～28日 Brillia HALL)、梅田芸術劇場とロンドンのチャリングクロス劇場共同プロデュース公演第一弾となる藤田俊太郎演出「VIOLET」(4月7日～26日 東京芸術劇場プレイハウス)、ホリプロはロイド＝ウェバー作曲の「スクール・オブ・ロック」(8月22日～9月20日 Brillia HALL)が中止になったほか7月から4カ月ロングラン予定の「BILLY ELLIOT—リトル・ダンサー」は9月に変更されるなど制作側も俳優も大きな痛手を受けた。

シーエーティプロデュース「Forever Plaid」は川平慈英、長野博、松岡充、鈴木壮麻と実力派が揃ったが中止された(5月14日～31日 よみうり大手町ホール)。TBSのステージア라운드版「WEST SIDE STORY」シリーズ3 (4月1日～5月31日 IHIステージア라운드東京)、日本歌劇団の「春のおどり」(4月18日～26日大阪松竹座、5月2日～5日 新橋演舞場)は、トップスター桐生麻耶のラストステージの予定だった。

来日公演はマシュー・ボーン「赤い靴」(6月17日～28日)「天使にラブ・ソングを」(7月7日～26日)「雨に唄えば」(9月26日～10月25日 いずれも東急シアターオーブ)、ダンスエンターテインメント「バーン・ザ・フロア」(5月28日～6月1日 日本青年館)が中止された。日本でもおなじみのカナダのシルク・ドゥ・ソレイユが「破産法の適用を申請」と6月29日付の新聞で報道されたし、ブロードウェイも2021年5月まで劇場閉鎖を発表。6月恒例のトニー賞も中止された

再開後も感染に揺れる

7月から徐々に再開に向けて動き始めた大劇場に水をあびせたのが、小劇場の新宿シアターモリエールでの「THE★JINRO—イケメン人狼アイドルは誰だ」(6月30日～7月5日)で起きた観客や出演者の感染だった。濃厚接触者は850人、感染者は11都道府県115人になった。これがきっかけで劇場側の検査体制が厳しくなり、ピリピリした緊張感の中で公演が持たれた。先陣を切った「BLUE RAIN」(チュ・ジョンファ作・演出、ホ・スヒョン音楽、荻田浩一演出)は、「カ

ラマーゾフの兄弟」を下敷き(父(今井清隆)と長男(吉野圭吾)との確執が描かれる。ビニールシートのついでを動かし、ツバキが飛ばぬ工夫をした装置が、コロナ時代の舞台を象徴していた(7月2日～12日 博品館劇場)。

「CALL」「Happily Ever After」を無観客で上演し、ライブ配信したシアタークリエは「SHOW - ISMS」(小林香作・演出)で舞台を再開した(7月20日～25日・28日～8月4日)。前半は井上芳雄、彩吹真央、知念里奈、新妻聖子らのコンサート。後半は美弥子ら主演「マトリョーシカ」をメインにした公演だが、前半に体調不良者が出て25日を休演した。

中川晃教中心の「ジャージー・ボーイズ」(7月18日～8月5日 帝劇)は「コンサート」に切り替わったが、劇場従業員のコロナ感染で18日～21日の4公演が中止された。

創立25周年を迎えたミュージカル座が「ひめゆり」(ハマナカオル脚本・演出・作詞・振付、山口琇也作曲)で初めて彩の国さいたま芸術劇場に進出(10月20日～25日)する予定だったが、稽古中に76人が感染した。「ひめゆり」は1996年初演以来毎年8月に上演してきたヒット作。沖縄戦で犠牲になった女学生や日本兵の話を描いたもので、4人のメインキャストのほかは48人がWキャストとあって感染者がふえた。

東宝も日本人キャスト版「RENT」(11月1日～12月6日 シアタークリエ)公演中、出演者の感染が続き、全公演が中止された。再開後もいつキャンセルになるか、年末まで不安な日々が続いた。

劇団四季「ロボット・イン・ザ・ガーデン」の成果

劇団四季はロングラン中の「ライオンキング」〔夏〕「アラジン」〔海〕「リトルマーメイド」(大阪四季劇場)「ノートルダムの鐘」(キャナルシティ劇場)「マン・ミーア」(3月28日～8月10日 神奈川芸術劇場)など全国で展開する公演の中止で大きな損害を蒙った。4カ月半に及ぶ中止公演数は、年間総公演数の1/3に当たる1103回、99万人の観客と85億円の売り上げが失われた。全国縦断公演で55万人の学生が観劇する「こころの劇場」(「ジョン万次郎の冒険」「人間になりたがった猫」)も中止され、21年も公演見合わせが決まった。

首都圏の新たな拠点となる新劇場 JR東日本四季劇場〔春〕〔秋〕の開場も延期された。本来なら〔秋〕は7月14日に「The Bridge—歌の架け橋」、〔春〕は9月10日に「アナと雪の女王」でこけら落としの予定が、〔秋〕は10月23日「オペラ座の怪人」、〔春〕は21年1月10日「The Bridge」で開場。「アナと雪の女王」は、21年6月にずれ込んだ。

そんな苦境の中で「南十字星」以来16年ぶりの新作オリジナル・ミュージカル「ロボット・イン・ザ・

ガーデン」(デボラ・インストール原作、長田育恵台本・作詞、河野伸音楽、小山ゆうな演出)が成果を見せた。近未来を舞台に心に傷を受けた主人公ベン(田邊一也)が壊れかけた旧型ロボットのタングと出会い、修理しようと旅を続けるうちに心が通い人間性を取り戻してゆく。「回復と再生」を描いた作品。二足歩行で目が動くタングを扱う2人のパペティア(パペットの操者)の息がびったりで、タングがしだいに人間の心を持ったかのように見えた(10月3日～11月29日・21年1月17日～3月21日 自由劇場)。

21年8月に新作オリジナルファミリー・ミュージカル「はじまりの樹の神話—こそあどの森の物語」(岡田淳原作)の上演が決まった。困難を乗り越えて四季は走り続けている。劇団四季は「キャッツ」で第27回読売演劇大賞の芸術栄誉賞を受賞した。

団結の強さを示す宝塚歌劇団

宝塚歌劇団の本公演(年間9公演)は、宝塚大劇場から東京宝塚劇場へと続き、退団者は東京で最後の別れを告げる。20年の東京宝塚劇場は宙組「El Japón—イスペインのサムライ」(1月3日～2月16日)、雪組「ONCE UPON A TIME IN AMERICA」(2月21日～3月22日)、星組「眩耀の谷—舞い降りた新星」(3月27日～5月3日)、花組「はいからさんが通る」(5月8日～6月14日)、月組「WELCOME TO TAKARAZUKA」(6月19日～7月26日)、宙組「アナスタシア」(7月31日～8月30日)、雪組「シルクロード」(9月4日～10月11日)、星組「ロミオとジュリエット」(10月16日～11月22日)、花組「アウグストウス—尊厳ある者」(11月27日～12月27日)と決まっていた。

公演中に被害を受けたのは東京では雪組で、小池修一郎作・演出「ONCE UPON A TIME IN AMERICA」だった。最初の公演中止は2月29日から3月9日。3月10日に再開し、2日間3回公演したところで再び中止され、あとは3月22日の千秋楽2回の公演で終わった。20世紀のアメリカ社会を背景に主人公メーダールの生き様を少年期、成年期、初老という3つの時間軸を交錯させながら描いたもので、ヌードルスを演じた望海風斗の格好良さは、これぞ宝塚であった。小池修一郎にとっては歌劇団理事としての最後の公演だけに悔しい思いで締めくくることになった。

宝塚大劇場では花組の柚香光と華優希の新トップコンビのお披露目「はいからさんが通る」(3月13日～4月20日)が中止された。スケジュールを遅らせて再開(7月17日～9月5日)したものの、出演者8人、スタッフ3人が陽性となり、8月31日まで公演中止。東京宝塚劇場も4か月遅れの星組「眩耀の谷」(8月5日～9月20日)でも出演者の1人のコロナ感染が判明し、8月31日まで中止とコロナに翻弄された。客席通路を使わず、若手

たちを二班にわけたためロケットも半数になり、新人公演もとりやめた。11月20日から始まった月組公演は、21年1月3日が千秋楽という異例の公演になった。日本物レビュー「WELCOME TO TAKARAZUKA—雪と月と花と」(植田紳爾作・演出)は歌舞伎女形の坂東玉三郎の監修だけに美的感覚が溢れていた。この舞台で「雪」を舞った松本悠里が64年にわたる宝塚生活に別れを告げた。

もう1本の「ビガール狂騒曲」(原田諒作・演出)は、ムーランルージュを舞台に「十二夜」をからませたもので、珠城りょうが男装でムーランで働く娘と義妹を探すベルギー貴族の二役で活躍した。

本公演以外も宙組の桜木みなと主演「壮麗帝」(3月28日～4月4日 日本青年館 4月11日～19日 シアター・ドラマシティ)、宙組真風涼帆主演「フライングサバ」(3月30日～4月13日 TBS赤坂ACTシアター)、望海風斗主演「NOW! ZOOM ME!」(4月30日～5月10日 文京シビックホール)など次々中止された。

4カ月の公演中止のせいか退団者は専科の華形ひかるを含めて例年の1/3の13人とどまった。松本悠里は21年の退団者になる。本来なら雪組トップコンビの望海風斗と真彩希帆が10月11日に退団予定が21年4月11日に、月組の珠城りょう・美園さくらコンビは、21年2月から21年8月15日に延期された。

演出家の酒井澄夫が4月「永年の宝塚歌劇における作・演出」の功績で、第45回菊田一夫演劇賞特別賞を受賞した。日本物の振付担当の上方舞山村流六世宗家・山村友五郎が紫綬褒章を受章した。悲しいニュースは「ノバ・ボサ・ノバ」の名舞台を残した真帆志ぶき(87)が3月4日、振付の花柳壽應(89)が9月26日に亡くなった。

活気づいた下半期

劇場再開を待っていたかのように井上芳雄が「SHOW - ISMS」(7月20日～25日 シアタークリエ)に出演後、堂本光一と「ナイツ・テイル in シンフォニックコンサート」を開催、「ダディ・ロング・レグス」(9月4日～10日 シアタークリエ)で、坂本真綾に対して微妙に揺れる男心を見せた。初役の「プロデューサーズ」(トーマス・ミーハン脚本、メル・ブルック脚本・歌詞・音楽、福田雄一潤色・演出)で会計士レオ(吉沢亮・大野拓朗)を相手にボロ儲けを狙うプロデューサーマックスに挑戦したが、際どいギャグの連発は、井上には不向きだった(11月9日～12月6日 東急シアターオーブ)。

演出家の藤田俊太郎の活躍が目立った。井上ひさし作「天保十二年のシェイクスピア」を演出。高橋一生の三世次が格差社会の鬱屈した気持ちを明確に演じた。4月中止された「VIOLET」(ドリス・ベッツ原作、

ブライアン・クローリー脚本・歌詞、ジェーン・テソーリ音楽)に執念を燃やし、9月3日～6日まで4日間5回限定で上演した。すでにロンドンで上演しているが、日本版への思いが強く、四方を囲む舞台にはならなかったがこの舞台に賭ける意欲を見せた。顔の傷を隠して生きてきたヴァイオレット(唯月ふうか・優河)が、長距離バスで出会った黒人兵(吉原光夫)と白人兵(成河)と知り合い、しだいに自分を取り戻す。舞台では顔の傷も黒人の黒塗りもなく、観客の想像にまかせる演出である。

「NINE」(アーサー・コピット脚本、モーリー・イェストン作詞・作曲)は、スランプに陥った映画監督グイドが8人の女性たちによって悩みながらも再生してゆく。城田優のグイドの悩める姿がいい(11月12日～29日 赤坂ACTシアター)。

ウイズコロナの時代、だれもがどう生きるか模索する中で「生きる」(高橋知伽江脚本・歌詞、ジェイソン・ハウランド作曲・編曲、宮本亞門演出)が再演された。定年間近の渡辺勘次(市村正親・鹿賀丈史)が、余命わずかと知った時、初めて自分の生きる意味を探し始める心情が切実に伝わった(10月9日～28日 日生劇場)。

7月からの再演が2カ月遅れた「ビリー・エリオット」(リー・ホール脚本・作詞、エルトン・ジョン音楽、スティーヴン・ダルドリー演出、ピーター・ダーリング振付)も、バレエダンサーの夢に向かって突き進む少年ビリーが鮮明に浮き彫りにされた。リモート稽古を続けた4人の少年たちは将来の可能性を見せた。バレエ教師は柚希礼音のほか新たに安蘭けいが加わった(9月11日～10月17日 赤坂ACTシアター)。

利口になりたいと外科手術を受けたチャールズ・ゴードン(矢田悠祐)を描いた「アルジャーノンに花束を」(10月15日～11月1日 博品館劇場)も新聞記者ジョー・ブラッドレー(加藤和樹・平方元基)がアン王女(朝夏まなと・土屋太鳳)に俗社会を体験させる「ローマの休日」(堀越真脚本、斉藤由貴作詞、大島ミチル音楽、山田和也演出)も、そのあとどう生きるのだろうと思ってしまう。「ビューティフル」でキャロル・キングの半生を演じた平原綾香がよかった。

初演作品も多い。「フラッシュダンス」(トム・ヘドリー脚本、ロバート・キャリー脚本・作詞、ロビー・ロス作曲、岸谷五朗演出)は、鉄工所勤めのアレックス(愛希れいか)が、プロダンサーの夢を追う話だが、愛希のダンスが素晴らしい(9月12日～26日 日本青年館ホール)。「メイビー・ハッピー・エンディング」(ウィル・アロンソン&ヒュー・パーク作、上田一豪演出)は、死を待つ旧型ロボットたちの中で、オリバー(浦井健治)とクレア(花澤香菜・中川翔子)は、コンピューターにプログラミングされていない愛情に目ざ

める。ロボットの動きが巧みな浦井は、クレアとの別れに哀愁を見せた(8月17日～30日 シアタークリエ)。

若者たちの悩みや感情をぶつけ合う「EDGES」(ベンジ・パセック&ジャスティン・ボール作・作詞・作曲)は、2パターン演出で、元吉庸泰(12月3日～6日)と荻田浩一(12月7日～10日 新国立劇場中劇場)が連続上演した。その試みが面白い。「NOW.HERE.THIS」(ハンター・ベル脚本、スーザン・ブラックウエル脚本、ジェフ・ポーウェン作詞・作曲、西田直木構成・演出)は、4人の同級生が自然史博物館で生命の神秘や歴史にふれるうちに、なぜ今の自分がいるのか考え始める。主演の浜中文一以外はWキャストだ。

オールスタッフプロデュースの「獅子吼」(浅田次郎原作、シライケイタ脚本、小澤時史音楽、和田憲明演出)は、戦時下、獅子(石鍋多加史・井上一馬)と飼育員の交流の暖かき、獅子は射殺される時初めてほえた。その悲しみがじわりと伝わった(10月21日～11月1日 上野ストアハウス)。

痛快でにぎやかな作品が「フリムーンシスターズ」。シアターコクーン芸術監督に就任した松尾スズキの作・演出(渡邊崇音楽、井出茂太振付 10月24日～11月23日)。無気力なコンビニ店員(長澤まさみ)、10年ぶりに復帰を目指す女優(秋山菜津子)とその親友のゲイ(阿部サダヲ)が、人生や社会を変えようとするザワツいた内容だが、松尾的で面白い。

ベートーヴェン生誕250年に因んだ作品が2本並んだ。『Op.110ベートーヴェン「不滅の恋人」への手紙』(小熊節子原案、木内宏昌脚本、新垣隆音楽・演奏、栗山民也演出)は、ベートーヴェンの後継者リース(田代万里生)が、師を語る形式で、恋人とされるヒロインアントニー(一路真輝)が登場する(12月11日～26日 よみうり大手町ホール)。再演の「No.9-不滅の旋律」(中島かずき脚本、三宅純音楽、白井晃演出)は、聴覚障害になり始めてからのベートーヴェン(稲垣吾郎)の耳の役割を果たす秘書マリア(剛力彩芽)や兄弟との関係が描かれる。耳が不自由になってからの稲垣の荒れ狂い方が凄まじい(12月13日～21年1月7日 赤坂ACTシアター)。充実した下半期であった。

個々の活躍が目立つジャニーズ事務所

9月27日にジャニーズ事務所は、藤島メリー泰子が経営に関与しない名誉会長に退き、藤島ジュリー景子社長、滝沢秀明副社長による経営体制を発表した。元SMAPの中居正広が3月、元NEWSの手越祐也が6月、少年隊の錦織一清・植草克秀が12月末、TOKIOの長瀬智也が21年3月に退所し、嵐が年末で21年間の活動を停止した。

堂本光一は「Endless SHOCK」が2月中旬に中止になったが、演出家として「DREAM BOYS」(12月10日

～21年1月27日 帝劇)を演出。岸優太、神宮寺勇太ら若手たちが生き生き活躍した。堂本は20年にわたり「SHOCK」シリーズを牽引してきた功績に対して第45回菊田一夫演劇大賞を受賞した。

外部出演もNEWSの増田貴久が「ハウ・トゥー・サクシード」(9月4日～20日 シアターオーブ)で、窓ふきの少年フィンチが出世街道を突っ走るさまを明るく演じた。屋良朝幸は「Gang Showman」(玉野和紀脚本・作詞・演出・振付 9月18日～10月3日 シアタークリエ)で潔癖症のギャングで高所恐怖症、金属アレルギーのジェイムズを演じて笑わせた。少年隊に一人残った東山紀之は、パルコ劇場の「チョコレートドーナツ」でショーパブのダンサーを主演した。ジャーニーズ事務所の俳優たちは他流試合で力を発揮している。

4カ月半の空白があったが、専門誌の「ミュージカル」誌が例年通り2020年のミュージカル・ベスト10を発表した(選出メンバーは評論家、ジャーナリスト20名)。

作品BEST10

- 第1位「ロボット・イン・ザ・ガーデン」(劇団四季 自由劇場 10月3日～11月29日)演出・小山ゆうな
- 第2位「ナイン」(梅田芸術劇場+TBSテレビ TBS赤坂ACTシアター 11月12日～29日)演出・藤田俊太郎
- 第3位「シャボン玉とんだ宇宙までとんだ」(東宝 シアタークリエ 1月7日～2月2日)演出・小林香
- 第4位「VIOLET」(梅田芸術劇場 東京芸術劇場プレイハウス 9月4日～6日)演出・藤田俊太郎
- 第5位「ONCE UPON A TIME IN AMERICA」(阪急電鉄+宝塚歌劇団雪組 東京宝塚劇場 2月21日～3月22日 一部公演中止)演出・小池修一郎
- 第6位「天保十二年のシェイクスピア」(東宝 日生劇場 2月8日～29日 一部公演中止)演出・藤田俊太郎
- 第6位「ピガール狂騒曲」(阪急電鉄+宝塚歌劇団月組 東京宝塚劇場 11月20日～2021年1月3日)演出・原田諒
- 第8位「アナスタシア」(梅田芸術劇場 東急シアターオーブ 3月1日～28日 一部公演中止)演出・D・トレスニャク
- 第9位「プロデューサーズ」(東宝 東急シアターオーブ 11月9日～12月6日)演出・福田雄一
- 第10位「Op.110 ベートーヴェン「不滅の恋人」への手紙」(サンライズプロモーション東京+パソナ

グループ よみうり大手町ホール 12月11日～26日)演出・栗山民也

再演賞

「ビリー・エリオット」(TBS+ホリプロ+梅田芸術劇場+WOWOW TBS赤坂ACTシアター 9月11日～10月17日)演出・S・ダルドリー

演出家賞

藤田俊太郎(「天保十二年のシェイクスピア」「VIOLET」「ナイン」)

男優BEST10

- 第1位 城田優(「ナイン」)
- 第2位 井上芳雄(「シャボン玉とんだ宇宙までとんだ」「プロデューサーズ」)
- 第3位 浦井健治(「天保十二年のシェイクスピア」「メイビー・ハッピー・エンディング」)
- 第4位 三浦春馬(「ホイッスル・ダウン・ザ・ウインド」)
- 第5位 中川晃教(「フランケンシュタイン」他)
- 第6位 佐野正幸(「オペラ座の怪人」)
- 第6位 高橋一生(「天保十二年のシェイクスピア」)
- 第6位 吉原光夫(「VIOLET」)
- 第9位 田邊真也(「ロボット・イン・ザ・ガーデン」)
- 第10位 堂本光一(「Endless SHOCK」)

女優BEST10

- 第1位 咲妃ゆゆ(「シャボン玉とんだ宇宙までとんだ」「ナイン」)
- 第2位 安蘭けい(「サンセット大通り」「ビリー・エリオット」)
- 第3位 望海風斗(「ONCE UPON A TIME IN AMERICA」)
- 第4位 木下晴香(「アナスタシア」「プロデューサーズ」)
- 第5位 愛希れいか(「フランケンシュタイン」)
- 第6位 高野菜々(「SUNDAY」)
- 第6位 唯月ふうか(「VIOLET」「生きる」「天保十二年のシェイクスピア」)
- 第8位 優河(「VIOLET」)
- 第9位 長澤まさみ(「フリムンシスターズ」)
- 第10位 濱田めぐみ(「サンセット大通り」)
- 第10位 柚香光(「はいからさんが通る」)

[地方演劇]

地方演劇～明暗分けた演劇祭

森 洋三

新型コロナの国内感染で安倍晋三首相がスポーツ・文化イベントの2週間の中止・延期を要請したのが2月26日。さらに4月7日の東京、大阪、福岡など7都府県対象の「緊急事態宣言」(16日に全国に拡大)が発出される演劇界は激震に見舞われた。いち早く要請に応え、2月26日に初日を開けたばかりの福岡・博多座の市川海老蔵特別公演が27日昼の部から公演中止を余儀なくされた。松竹大歌舞伎地方巡演を取り仕切る公益社団法人全国公立文化施設協会(公文協)では3月23日に西コース(4月1日～26日)と東コース(5月1日～26日)を中止、さらに5月26日には夏の中央コース(8月31日～9月25日)の中止も発表した。社会人が中心の地域劇団は軒並みの公演中止・延期。PCR検査などコロナ対策に経済的な負担が重くのしかかり、活動を停止する劇団も出たが、会員制の秋田演劇鑑賞会が21年末の解散、和歌山演劇鑑賞会では300人もの会員が退会するなど、観客をも巻き込んだ苦境に陥った。

緊急事態宣言解除～関西地区の素早い立ち上がり

「緊急事態宣言」は5月25日には解除されたものの、未曾有の難局に「三密」や各種ガイドラインへの対処で手探りの状態が続く。こうした状況にいち早く対応したのが京都の狂言・茂山千五郎家。3月1日には動画投稿サイト「ユーチューブ」で自宅稽古場での「非接触型狂言会」を配信、ライブ配信は11月のシアターE9京都での特別公演まで続いた。さらに「三密」が避けられる野外公演に着目、6月27日に京都在住の能楽、舞踊、落語界などに呼びかけ京都市東山区の円山公園音楽堂で特別イベント「WE'RE BACK KYOTO」を行ない観客で多彩な公演を展開した。京都では小劇場・シアターE9京都の建設・設備資金に当時は耳慣れないクラウドファンディングによる資金調達を早くと採り入れ、また大阪府では5月末から劇場入り口で観客自身がスマホのカメラによるQRコード読み取り・登録する「大阪コロナ追跡システム」をいち早く導入・推進するなど、感染への対応の素早さが見られた。

地方各地の劇場再開は北九州芸術劇場(北九州市芸術文化振興財団)では7月7日に鑑賞団体・北九州市民劇場の例会として東京の青年劇場による「キネマの神様」(原田マハ原作、高橋正剛脚本、藤井ごう演出)で再開。青年劇場は7・8月に九州各地を巡演している。仙台市では7月1日からせんだい演劇工房10-BOXでYONEZAWA GYUオフィス主催の日本現代戯曲名作シリーズ「今は昔、栄養映画館」(竹内統一郎作、高橋菜穂子構成・演出)有観客公演でスタート、北海道は札

幌座が7月23日から劇のたまご公演「ぐりぐりグリム～長靴をはいた猫」(グリム童話より清水友陽演出)などで再開した。大劇場の公演再開も関西地区が早く、兵庫・宝塚大劇場が7月17日からの花組「はいからさんが通る」で再開。しかし同公演の出演者・スタッフにコロナ感染者が出て一時中止(9月3日再開)、早期開幕への賛否両論にさらされる一幕もあった。

こうした中で1921年(大正10年)に前身の中座として開場した福岡・飯塚市の嘉穂劇場(木造建築の国登録文化財)の経営危機が伝えられた。江戸歌舞伎の様式を継承する同劇場は歌舞伎公演、また大衆演劇の殿堂として親しまれている。11月末に運営する認定NPO法人嘉穂劇場が経営難から法人を解散、新聞報道によると飯塚市が建物・土地を引き継ぐというが、その前途はなかなか厳しいものがありそうだ。

海外劇団の来日不能で中止を余儀なくされた国際演劇祭

コロナ禍は各地の演劇祭に大きな影響を与えた。開催時期によって無事に幕を開けた演劇祭も少なくなかったが、被害を最もストレートに受けたのが国境閉鎖に起因する国際演劇祭だ。国際アマチュア演劇連盟の大規模な公式行事「2020年とやま世界こども演劇祭～第4回とやま世界こども舞台芸術祭」は8月に富山県民会館、富山市芸術文化ホール、高岡文化ホールなどを会場に海外19カ国20団体が参加を予定していたが、海外組の参加不能でやむなく中止(延期)。また静岡県舞台芸術センター(SPAC)主催の「ふじのくににせかい演劇祭」(4月25日～5月6日)が開催中止、それに代わる企画として同期間にオンラインを中心とした「くものうへにせかい演劇祭」を実施、宮城聴芸術総監督の新作「おちよこの傘持つメリー・ポピンズ」の稽古風景などZOOMを使用して配信した。3年に一度、海外劇団を招聘、しいの実シアターや平原会館などを会場に開かれる「松江・森の演劇祭2020」(10月31日～11月3日)は2年後に延期になった。

中止、開催に揺れた地方演劇祭

国内演劇祭の中止・延期は枚挙にいとまがない。「札幌市民芸術祭2020」(1月24日～11月28日、シアターZOO、コンカリーニョほか)、「第9回はちのへ演劇祭」(1月29日～31日、八戸ポータルミュージアム)、「第24回なにわ人形劇フェスティバル」(4月5日、一心寺シアター倶楽)、「第44回大阪春の演劇まつり」(5月30日～7月26日、リパティホールほか7会場)、「小さい演劇祭SFフェス2020」(7月6～12日、札幌シアター

ZOO)、「第52回水戸市芸術祭演劇フェス」(8月21～30日、ACM劇場)、「Dengeki〜くまもと演劇バトル」(9月22・23日、早川倉庫)など多数の演劇祭が中止・延期に追い込まれた。

一方で開催された演劇祭も少なくない。6劇団が参加した「みずほ演劇祭2020」(1月18日～2月9日、サンシャインホールほか)、9劇団参加の「おうさく学生演劇祭」(2月25日～3月15日、一心寺シアター倶楽ほか)、「キビるフェス2020～福岡きびる舞台芸術祭」(2月8日～3月1日、福岡市内の4演劇練習室)。10劇団参加による「関西演劇祭～お前ら、芝居たろか!」は3月の東京公演は中止したが、11月21～29日、クール・ジャパン・パーク大阪TTホールで予定通りに行った。

富山・利賀村を拠点とする鈴木忠志主宰のSCOTによる演劇祭「SCOTサマー・シーズン」は8月28～30日、9月4～6日に開催。岩舞台、野外劇場、利賀大山房を会場にSCOTの新作火劇「世界の果てからこんにちにはⅡ」(鈴木忠志構成・演出)ほかに上演。さらに鈴木はSCOT「ウインター・シーズン」を24年ぶりに復活させ、12月26・27日に利賀大山房で「ニッポンジン～長谷川伸の作品より」「世界の果てからこんにちにはⅡ」(鈴木忠志構成・演出)を上演した。9月9～22日には兵庫・豊岡市の城崎国際アートセンター、新設の江原河畔劇場など6会場で「豊岡演劇祭2020」(平田オリザ・フェスティバルディレクター)。当初構想の海外劇団参加はなかったがマームとジプシー、五反田団、青年団など11公演。公式プログラムに約2800人の観客を集め、フリンジ(自主参加)イベントも20以上の団体・個人が豊岡市内に展開した。ほぼ同時期、9月12日～27日には鳥取市の鳥の劇場(中島諒人芸術監督)による「鳥の演劇祭13」(中島諒人芸術監督)が若手演劇人の支援事業としてlibido(千葉県松戸市、岩澤哲野代表)が6月末から鳥取に滞在・創造した「AESOP 0.9」(イソップ寓話集より岩澤哲野構成・演出)、「友達」(安部公房作、中島諒人演出)など多彩なプログラムで開催。豊岡演劇祭と鳥の演劇祭を連携する臨時バスも運行、観客の便宜を図った。これら3演劇祭に関連する舞台芸術財団演劇人会議(平田オリザ代表)が8月末に「利賀文化会議」に名称を変更、鈴木忠志理事長、評議員に平田オリザほか、理事として中島諒人が名を連ねている。

このほか関西小劇場演劇界の18劇団・ユニットが「演劇を止めるな。芸術を止めるな」を合言葉に9月19・20日にABCホール(客席327席)を会場に「関西小劇場演劇祭～ターニングポイントフェス」を開催して短編を上演、同時に無料ライブ配信を行っている。

オンライン演劇、WEB配信

コロナ禍に対応してオンライン演劇やWEB配信、

無観客公演などが各地で行われた。演劇祭そのものをオンライン化したのが香川県高松市での「マエバブ演劇フェスティバル2020 online」。従来は高松城内の国指定重要文化財・披雲閣で開催してきたが、今回は各劇団の短編作品や即興劇を8月29日午後8時から24時間にわたって無料(おひねり制)で発信した。一方、オンライン会議アプリZoomによる生演劇を実施した劇団Patch(大阪市)。5月29日から6月28日の約1カ月間に連ドラ演劇「ロックダウンスパイ」(高殿円脚本、大熊ひろたか演出)を上演。1話25分の作品5話(1話880円)を午後10時からそれぞれ3日間配信、終演後に観客が出演者にオンラインで声を掛けられるユニークな試みだった。

地方演劇界で人気の演目・作家は?

すでに評価の定まった人気戯曲上演が地方演劇界に目立つ。そこでコロナ禍以前の2015～19年の5年間に上演された作品を調べてみた。地域劇団を中心にした調査だが、あくまで大まかな傾向、参考データとしてとらえてほしい。

▽【井上ひさし】〈15年〉「夢の裂け目」劇座(名古屋)、父と暮らせば、演劇ユニット体温(広島市)、劇団THE風・FOU(新潟・柏崎市)。〈16年〉「兄おとうと」岡崎演劇集団(愛知・岡崎市)、「闇に咲く花」劇団からっかぜ(浜松市)、劇団息吹(東大阪市)、「葦原校校」横浜宅座(横浜市)。〈17年〉「闇に咲く花」劇団弘演(弘前市)、「父と暮らせば」劇団静芸(静岡市)。〈18年〉「父と暮らせば」劇団名芸(名古屋市)、演劇ユニットtogether again(埼玉・越谷市)。「紙屋町さくらホテル」劇団よこはま宅座。〈19年〉「父と暮らせば」演劇プロデュース企画MAM(札幌市)、「マンザナ、わが町」劇団静芸(静岡市)、劇団息吹(東大阪市)、「頭痛肩こり樋口一葉」劇団大阪豊麗線(大阪市)、「キネマの天地」劇団埼芸(埼玉・上尾市)。

▽【永井愛】〈15年〉「ら抜ききの殺意」劇団かに座(横浜市)、「時の物置」いわき演劇プロジェクト俳優養成塾(福島・いわき市)、「書く女」北九州芸術劇場リーディングセッション(福岡市)、「花咲く頃に」劇団未来(大阪市)。〈16年〉「ら抜ききの殺意」劇団うりんこ(名古屋市)、「片づけたい女たち」(新潟・柏崎市)劇団THE風FOU(17年)「日暮町風土記」劇団大阪豊麗線(大阪市)。〈18年〉「萩家の三姉妹」studioD2(奈良・生駒市)、「見よ、飛行機の高く飛べるを」劇団大阪(大阪市)、「パートタイマー・秋子」劇団山形(山形市)、「ら抜ききの殺意」劇団ふおるむ(兵庫・西宮市)。〈19年〉「かたりの椅子」劇団はぐるま(岐阜市)、劇座(名古屋市)、「誰も書いてはならぬ～ザ・空気」劇団どろ(神戸市)。

▽【北村想】〈15年〉「想稿・銀河鉄道の夜」シアターOrt(札幌市)。〈16年〉「寿歌」座・れらプロデュース(札

幌市)。〈17年〉「アトリエのある背中」虚空旅団(大阪市)、「寿唄」シアターども(北海道・江別市)、「ザ・シェルトー」劇団だいこん座(山形・鶴岡市)。〈18年〉「ザ・シェルトー」劇団息吹(東大阪市)、「寿唄」愛知県芸術劇場・SPAC共同企画(名古屋・静岡市)、SSTプロデュース(大阪市)。〈19年〉「寿唄」SPAC静岡県舞台芸術センター(静岡市)、「寿歌・Ⅱ」劇団THE風・FOU(新潟・柏崎市)。※このほか北村想書き下ろし船戸香里一人芝居・振り袖講談「転がる星」子守唄、すべてのひとに眠りを「かたり寿唄」の関西・名古屋公演が多数あり。

▽【マキノノゾミ】〈16年〉「高き彼物」静岡県舞台芸術センター(静岡市)、「ちゃっかり八兵衛」コンカリーニョプロデュース(札幌市)。〈18年〉「ちゃっかり八兵衛」コンカリーニョプロデュース(札幌市)。「さよなら龍馬」劇団壱劇屋(大阪・枚方市)、おおさか学生演劇祭共同プロデュース。〈19年〉「高き彼物」劇団からつかぜ(浜松市)、「殿様と私」劇団海鳴り(北海道・紋別市)。

▽【小川未玲】〈15年〉「ジュリエットたち」劇団更紗(名古屋市)。〈16年〉「お勝手の姫」劇団楽天夢座(山形市)。〈17年〉「もやしの唄」劇団せすん・劇団春日井(兵庫・尼崎市)、「お勝手の姫」劇団かに座(横浜市)。〈19年〉「もやしの唄」劇団ケツベキ(京都市)。

▽【畑澤聖悟】〈16年〉「カミサマの恋」劇団四紀会(神戸市)。〈17年〉「背中から40分」劇団葡萄座(横浜市)。〈18年〉「イノセント・ビートル」演劇集団和歌山(和歌山市)。〈19年〉「親の顔が見たい」劇団名古屋(名古屋市)、「ハイセイゼバ〜Hello Goodby」劇団大阪(大阪市)、「親の顔が見たい」Art-Loving(長野・軽井沢町)。

【ふたくちつよし】「夕空晴れて」静かな海へ〜MIN AMATA 劇団未来(大阪市)。「夏きたりなば」劇団海鳴り(北海道・紋別市)【堤泰之】「見果てぬ夢」劇団新劇場(札幌市)、岡崎演劇集団(愛知・岡崎市)。「煙が目にしみる」演劇集団和歌山(和歌山市)、劇団大阪シニア演劇大学(大阪市)【古川健】「親愛なるわが総統」劇団名古屋(名古屋市)。「追憶のアリラン」劇団きづがわ(大阪市)。「その頬、熱線に焼かれ」劇団未来(大阪市)。「挽歌」劇団きづがわ(大阪市)、「スイートホーム」劇団未来(大阪市)【篠原久美子】「空の村号」座・れら(札幌市)、劇団どろ(神戸市)、劇団からつかぜ(浜松市)【飯島早苗・鈴木裕美】「蠅取り紙〜山田家の五人兄弟」劇団からつかぜ(浜松市)、劇団いわき小劇場(福島・いわき市)、劇団名芸(名古屋市)。「魔法王の避妊法」岡崎演劇集団(愛知・岡崎市)【蓬萊太】「まほろば」劇団名芸(名古屋市)、いわき演劇プロジェクト(福島・いわき市)、劇団未来(神戸市)。「五十嵐伝〜五十嵐ハ燃エテイルカ2016広島版」演劇引力プロデュース

(広島市)、劇団ハタチ族(島根・雲南市)。

コロナ禍の中に地方演劇界で苦悩した地方劇団公演の一端を紹介。

【1月】10〜13日、劇団壱劇屋(大阪・枚方市)がin→dependente 1stで「劇の劇」(大熊隆太郎作・演出)を。15〜19日、劇団いるかHotel(兵庫・西宮市)が神戸アートビレッジセンターKAVCホールで「破稿 銀河鉄道の夜」(水野陽子作、谷省吾脚本・演出)。17〜19日、関西芸術座(大阪市)がABCホールで「ベルナルダ・アルバの家」(ロルカ作、松本昇三演出)を、18・19日、劇団芝居かいとうらんま(岐阜・大垣市)が瑞穂市総合センターで「ジュリアン〜警部シリーズ〜警部と探偵、その助手と殺人鬼」(後藤卓也脚本、蒙古斑演出)を上演。23日、劇団道化座(大阪・枚方市)が神戸文化ホールで創立70周年・震災メモリアル25th「ともちゃんち」(たなかとも原作、おおやまかづき作・演出)。25・26日、アクティブハカタ(福岡市)がベイサイドライブホールでプロデュース公演「マイム★シアター」(はせがわ天晴作、伊集院晃生演出)を。【2月】1・2日、劇団津演(三重・津市)がアストホールで「はるなつあきふゆ」(別役実作、岸武男演出)を。8日、劇団四紀会(神戸市)が尼崎ビックロシアター大ホールで「孫悟空の大冒険」(森卓也、桜井敏・脚色、岸本敏朗・構成・演出)。8・9日、劇団きらら(熊本市)がゆめアール大橋小劇場で「70点ダイアリーズ」(池田美樹作・演出)を上演。13〜16日、劇団名芸(名古屋市)がアトリエで「千石がゆく」(広島友好作、長田芳枝演出)。20〜24日、演劇引力広島(広島市)がJMSアステールプラザ多目的スタジオでプロデュース公演「泥を泳ぐ」(象千誠作・演出)を。22・23日、劇団すがお(三重・桑名市)が桑名市総合福祉会館で「闇に咲く花」(井上ひさし作、石垣まさし演出)。29日〜3月2日、劇団光合聲(大阪市)が一心寺シアター倶楽で「忍武の咎」(木村遼太作・演出)を。【3月】6〜8日、演劇ユニット衝空観(大阪市)がin→dependente 1stで「アリス・イン・スランパランド」(銭山伊織脚本・演出)。21・22日、劇団どろ(神戸市)が新長田小劇場で「妥協点P」(芝幸男作、合田幸平演出)を。24日、劇団りゃんめんにゅーろん(大阪市)がin→dependente 1stで「麻酔みいたいな」(南出謙吾作・演出)を上演。【4月】18日、劇団からつかぜ(浜松市)が劇団アトリエで無観客公演「異性愛」(Anne作、高橋佑治演出)を、3〜5日、劇団短距離男道ミサイル(仙台市)がせんだい演劇工房10-BOXで「春とシュララライツ」(本田稜脚本・演出)を無観客公演。

【7月】10〜13日、コトリ会議(大阪市)が伊丹市アイホールで「晴れがわ」(山本正典作、山本正典・原竹志演出)。18・19日、劇団すかんば長屋(大阪市)がin→d

ependente 1stで「深川生首橋」(神原くまこ作・演出)を。**【8月】**16～18日、悪い芝居(大阪市)がHEP HALLで「アイスとけるとヤバイ」(山崎彬作・演出)。21日、劇団名古屋(名古屋市)が劇団アトリエで朗読公演「アトリエからのお届けもの～忘れがたき役たちに捧ぐ」(久保田明構成・演出)を。**【9月】**5・6日、世界劇団(愛媛・東温市)がシアターねこ(松山市)で「天は蒼く燃えているか」(芥川龍之介「アグニの神」より本坊由華子脚本・演出)を。18日、劇団道化座(神戸市)が兵庫県立芸術文化センター阪急中ホールで「日向家の五人姉妹」(壺井栄原作、おおやかづき作・演出)を上演。**【10月】**10・11日、演劇集団和歌山(和歌山市)が和歌山県民文化小ホールで創立50周年記念「闇の道連れ」(楠本幸男作、山入桂吾演出)。25日、劇団だいこん座(山形・鶴岡市)が荘銀タクト鶴岡大ホールで「禍い転じて福となす?」(高橋紗空作・演出)を。**【11月】**3日、劇団やまなみ(山梨市)が管吹子スコアセンターで朗読劇「電池が切れるまで」(河野通方脚本、雨宮豊演出)を。4～18日、劇団ZIG.ZAG.BITE (福岡市)が甘棠館SHOW劇場で「露出狂」(中屋敷法仁脚本、劉生演出)、6～8日、劇団ふなきスタジオ(名古屋市)が名古屋市北文化小劇場で舟木淳米寿記念公演「男の花道」(小國英雄原作、菊本健郎演出)を。15日(12月6日)、演劇集団宇宙水槽(鹿児島市)が城西公民館で即興公演「死んだ勇者と愉快な友人」(宮田晃志・構成演出)をそれぞれ上演。21～23日、劇団静芸(静岡市)が劇団スタジオで「警女峠」(小島真本作、中川正臣演出)を、21・22日、劇団弘演(青森・弘前市)が弘前文化センター大ホールで「おにの捨六」(ゆいきょうじ作、秋本博子演出)。20～22日、28・29日、劇団未来(大阪市)がワークスタジオで「スリーウインターズ」(テーナ・シュティヴィチッチ作、しまよしみち演出)を上演。22日、劇団ヴォイス(愛媛・松山市)が愛媛県民文化会館サブホールで「again4～愛と追憶のかなた」(二神健悟作・演出)を。**【12月】**5・6日、劇団五期会(神戸市)がABCホールで「キセツノナイマチ」(山本周五郎原作、森脇京子脚本、井之上淳演出)。6日、劇団こじか座(愛媛・松山市)が松山市福祉センターで「グスコープドリの伝記」(宮沢賢治作、ふじたあさや脚本、来島明美演出)を上演。19・20日、劇団アンゲルス(金沢市)がスタジオ犀で「おーいゴドーおーい」(ベケット原作、岡井直道台本・演出)を。26・27日、劇団Patch(大阪市)がサンケイホールブリーゼで音楽朗読劇「マインド・リマインド～I am…～」(古家和尚作、木村淳演出)を、26・27日、劇団異空間(名古屋市)がスタジオ☆異空間で「月を待つ人」(岩本憲嗣作、谷口真梨演出)を上演。

[テレビ・ドラマ]

新型コロナウイルスとテレビドラマ

中町綾子

新型コロナウイルスの感染拡大は、テレビドラマの編成・制作にも大きな影響を与えた。俳優同士がぶつかり合うドラマの制作は、3密を避けざるを得ない状況下では中断を余儀なくされ、春(4月)編成の連続ドラマは次々に撮影中止となった。

そういった人命もアートも危機に瀕する、という深刻な状況もあってドラマの数は例年より大幅に減ったが、それでも、現場のドラマ制作への意欲は強く、NHKの「不要不急の銀河」(9月16日)のメイキング編では、衛生指導をする専門家の立ち合いの下に、どうすれば安全に撮影が出来るかを模索しながら、コロナ禍と向かい合う庶民の叫びを描くドラマ制作者の姿がつぶさに伝えられた。

戦争やパンデミックなど、人類の大きな危機には新たな芸術が生まれる。2020年のテレビドラマにそれを期待するのは無理筋かもしれない。ただ、人との接触がオンライン化される状況を逆手に取って、リモート撮影で哲学的なファンタジーを紡ごうとするリモートドラマ「Living」(NHK、5月30日、6月6日)といった新たな試みの数々も見られる。

そういったムーブメントの今後を期待しつつ、以下、2020年度の注目作を見ていきたい。

《連続ドラマ》

ドラマ24「コタキ兄弟と四苦八苦」

(テレビ東京、1月11日～3月28日)

家族の在り方を、“おやじ”の代行業という仕事を通して考えさせようとするアプローチが、はっとする思いを抱かせる。

兄の古渥一路(古館寛治)は一軒家に暮らす単身者で、そこに弟の二路(滝藤賢一)が離婚を迫られて転がり込む。二人とも無職で、ふとしたきっかけで兄弟そろって1時間千円の「レンタルおやじ」の仕事を始める。依頼は離婚届けの保証人の代行、親戚のふりをしての結婚式列席、孤独死寸前の若者の安否確認といったものだ。やがて、家を出て音信不通だった父(小林薫)が身元不明者として介護施設にいることや、近所の喫茶店でバイトをする顔なじみのサッチャン(芳根京子)が彼らの異母兄弟であることが語られる。何をもって普通とするか難しいが、このドラマではいろんな家族の形を描いていた。(脚本＝野木亜紀子、監督＝山下敦弘、チーフ・プロデューサー＝阿部真士、プロデューサー＝濱谷晃一、根岸洋之、平林勉、伊藤太一、オープニングテーマ＝Creepy Nuts「オトナ」)

火曜ドラマ「恋はつづくよどこまでも」

(TBS、1月14日～3月17日)

各話に散りばめられた胸キュンシーンが話題となったラブコメディだが、恋愛ドラマでもあり、お仕事ドラマでもあるといったバランス感覚が、ヒロイン像を魅力的なものにしている。

佐倉七瀬(上白石萌音)は、憧れの医師・天童渥(佐藤健)への5年越しの思いを貫いて看護師になり、彼と再会する。新人の彼女は、失敗も多いが、仕事にもひたむきで他の人が気づかない患者の様子にも気づく。そういった仕事ぶりもしっかりと描きながら、彼女を取り巻く人間関係も温かいものとして描く。恋に仕事に一生懸命な彼女を、同僚たちは、「勇者ちゃん」と呼んで応援する。恋愛においても、職場の人間関係においても、むやみに対立を作って盛り上げる作劇とは一線を隔すドラマで、協働、共生を心地よく描いた。タイトルは「恋つづ」と略され、SNS上で大きな盛り上がりを見せた。上白石萌音がひたむきなヒロインを、身近なものへと引き寄せている。(脚本＝金子ありさ、渡邊真子、演出＝田中健太、福田亮介、金子文紀、チーフ・プロデューサー＝磯山晶、プロデューサー＝宮崎真佐子、松本明子、原作＝円城寺マキ、主題歌＝Official髭男dism「I LOVE…」、東京ドラマアウォード2020単発ドラマ部門優秀賞、助演男優賞＝佐藤健、主題歌賞)

火曜ドラマ「私の家政夫、ナギサさん」

(TBS、7月7日～9月1日、当初の開始予定日は4月14日)

仕事に迫られる独身女性が、50歳のおじさん家政夫に心のもやもやを晴らされる。そんなキャッチコピー「おじさん、とっ散らかった私のココロもキレイにして!」通りのカタルシスが得られるドラマ。

大手製薬会社のMR(医薬情報担当者)・相原メイ(多部未華子)は、仕事一途で、部屋は散らかり放題。だから心も荒んでいく。そこで、ナギサさんこと鳴野ナギサ(大森南朋)というおじさん家政夫を雇う。ナギサさんは散らかっていた部屋を片づけ、バランスのとれた料理をつくる。最初は戸惑っていた彼女だが、その生活にすぐに馴染む。自分の苦手なこと(彼女にとっては家事)をアウトソーシングし、その役割をほかの人が担う。シンプルだが、この発想の転換が“性的な役割分担のイメージに縛られない社会参加のダイバーシティ”への気持ちのいい感情移入を誘う。終盤、ナギサ(派遣家政夫)がメイの担当ではなくなることを知っ

て、彼女はナギサに告白して新たな家族の形を築ことになる。それぞれの役割を果たす人のかげがえのなさを痛切に感じる。そんな彼女の姿もまた魅力的だ。コロナ禍を描くドラマではないが、孤独を感じることの多い時代に響くドラマになっていた。(脚本=徳尾浩司、山下すばる、演出=坪井敏雄、山本剛義、坂上卓哉、プロデューサー=岩崎愛奈・加藤章一、原作・四ツ原フリコ、主題歌=あいみょん「裸の心」)

日曜劇場「半沢直樹」

(TBS、7月19日～9月27日、
当初の開始予定日は4月19日)

2013年に大ヒットしたドラマの続編。銀行と証券会社を舞台とする嫉妬交じりの葛藤を、歌舞伎の大見得のようなけれど魅せた演出、演技が話題となった。

都市銀行から子会社の証券会社の営業企画部長として出向した半沢直樹(堺雅人)が、上司や政治家を相手に一歩も引かずに不正を暴く。前作でお馴染みの「やられたらやり返す、倍返しだ!!」の流儀を貫く。今作では、半沢の敵役・大和田曉取締役を演じた香川照之をはじめとする、出演者の思い切りのいい演技が企業内の対立等をより際立たせた。対立する者同士の至近距離での演技、感情を露わにする表情、そのドアップのカット(映像)、歌舞伎の「繰り上げ」のように相手を追い詰めるセリフ回しなどが見所となり、「お、し、ま、いDEATH!」(大和田)、「詫びろ!詫びろ詫びろ詫びろ……詫びろ半沢!」(伊佐山=市川猿之助)などのセリフが話題を呼んだ。登場人物も多く、ソーシャルディスタンスを越えて密な距離感で対峙する、そこにビジュアル化される緊張感には並々ならぬ迫力があつた。また今作では、半沢の妻の花(上戸彩)だけでなく、企業の女性幹部・平山美幸(南野陽子)、政府系銀行の担当者・谷川幸代(西田尚美)、国土交通大臣の白井亜希子(江口のりこ)の存在感も際立っていた。撮影進行状況の事情により第8話(9月6日放送予定)が急遽翌週に延期され、トークバラエティー『生放送!!半沢直樹の恩返し』が生放送される異例の編成も話題となった。ドラマが完結しない段階での出演者による撮影裏話を中心だが、ドラマづくりの熱意が伝えられ、ドラマの楽しみ方を伝えてもいた。(脚本=丑尾健太郎、金沢知樹、谷口純一郎、李正美、演出=福澤克雄、田中健太、松木彩、プロデューサー=伊與田英徳、川嶋龍太郎、青山貴洋、音楽=服部隆之、原作=池井戸潤)

金曜ドラマ「MIU404」

(TBS、6月26日～9月4日、
当初の開始予定日は4月10日)

捜査隊員が追う事件のアクチャリティと彼らの人生に向き合う姿が緊張感をもって、コロナ禍の現在に

力強いメッセージを放った。

警視庁軌道捜査隊、通称・軌捜、MIUは、事件の初動捜査を行う部隊で、隊員の伊吹藍(綾野剛)と志摩一未(星野源)は、24時間のタイムリミットのなかで事件解決を目指す。彼らが捜査する事件は、あおり運転や外国人留学生の置かれた状況、若者のドラッグ売買など、アクチュアリティに富む。そして、その一つ一つに奔走する伊吹と志摩のまっすぐな行動力は、「誰かが最悪の事態になる前に止められる超いい仕事じゃん」(伊吹/1話)「誰と出会うか、出会わないか。この人の行く先を変えるスイッチは何か」(志摩/3話)、「その1個、1個、1個、全部がスイッチで。なんだか人生じゃん?1個、1個大事にしてえの。あきらめたくねえの」(伊吹/6話)といった思いに支えられている。だからこそ、マスク姿で新たな事件に向き合う姿は、それがどんな「現在」であれ、そこに駆けつけること、そこに立ち会う意味に真摯に向き合うことの大切さと切実さを伝えていた。コロナ禍による放送中断を経て制作が再開された作品でもある。(脚本=野木亜紀子、演出=塚原あゆ子、竹村謙太郎、加藤尚樹、プロデュース=新井順子、音楽=得田真裕、主題歌=米津玄師「感電」)

「#リモラブ ～普通の恋は邪道～」

(日本テレビ、10月14日～12月23日)

10月期放送の連続ドラマで、コロナ禍をドラマの中で描いたものは2作品で、この「#リモラブ」はマスク着用、オンラインという日常風景をストレートに取り入れて、恋愛下手な産業医の不器用でぎこちない恋を描いた。

大手企業の産業医・大桜美々(波留)の日々は、2020年の4月2日の朝の出勤風景から始まる。彼女自身はもちろん誰もがマスク着用で過ごしている。

対面が難しい日々である。当然、恋愛も自粛期間中に始めたオンラインゲームのチャットがきっかけとなっている。このドラマではそういった日常の中で、美々の厳格な感染症安全対策指導(最終回で、彼女が感染症の拡大防止に大きな責任感を抱いていたこと、張り詰めた気持ちでいたことが語られる)と、それとはあまりにも落差のある不器用すぎる恋愛がコミカルに描かれる。オンラインのやりとりで別れの局面が訪れた時に、美々が強く抱く「この人を逃してはいけない」は、「私の家政夫のナギサさん」にも見られた切実な想いである。(脚本=水橋文美江、演出=中島悟、丸谷俊平、チーフプロデューサー=加藤正俊、プロデューサー=榎山裕子、秋元孝之、主題歌=福山雅治「心音」)

「姉ちゃんの恋人」

(関西テレビ、10月27日～12月22日)

2020年のハロウィーン間近からクリスマスまでの東京を舞台に、そのドラマの中にマスク着用の日々を映した。

ホームセンターで働く安達桃子(有村架純)が主人公で、第1話では客がマスクを競って買い求める光景が回想場面として描かれた。そのシーンでは、対応する桃子ら店員も客もみなマスクを着用していた。また、このドラマでは毎回の次回予告の最後に、「このドラマはフィクションです。演出の都合上マスクは着用しておりませんが、撮影は専門家の指導のもと安全に行っています」とテロップで表示した。(脚本＝岡田恵和、演出＝三宅喜重、本橋圭太、宝来忠昭、プロデューサー＝岡光寛子、白石裕菜、平部隆明)

〈リモートドラマの試み〉

2020年5月から6月にかけて、リモートドラマと称されるドラマが幾つか登場した。打ち合わせやリハーサル、収録などをリモートで行うもので、以下のような作品が放送された。

「今だから、新作ドラマ作ってみました」

(NHK、5月4日、5日、8日)

先陣を切った企画の一つで、この枠では3本の作品が放送された。公式ホームページタイトルには、“テレビ初!?テレワークドラマ”の表記が打たれ、リモートドラマであることが強調された。

3作品とも、カメラを固定し、出演者は一つのセットに1人だけである。離れた場所の出演者との掛け合いの中でストーリーが展開した。第1夜「心はホノルル、彼にはビーナツバター」(作＝矢島弘一、出演＝満島真之介、前田亜季)。第2夜「さよならMyWay!!!」(作＝池谷雅夫、出演＝小日向文世、竹下景子)。第3夜「転・コウ・生」(作＝森下佳子、出演＝柴咲コウ、ムロツヨシ、高橋一生)

「2020年五月の恋」

(WOWOWプライム、6月2日～5日全4話＝1回＝5分、

先行して5月28日～31日に

You Tube WOWOWオフィシャルチャンネルとWOWOWメンバーズオンデマンドで無料配信)

数年前に離婚し互いに連絡をとることもなかった夫婦の偶然の再会。そのドラマの中に、コロナ禍の孤独をやさしく、あたたかく描く。

設計会社の営業マンのモトオ(大泉洋)は不慣れなリモートワークにいそしむ毎日。そんな彼が、元妻のユキコ(吉田羊)に間違い電話をしてしまう。スーパー

の仕事で疲れて帰ってきた彼女だが、つつい話し込んでしまう。人と会うことがめっきり減り、本音を話しにくい状況下。4日間の電話に互いの心が癒され慰められる描写に、岡田恵和ならではのやわらかな時間描写の味わいがある。(脚本＝岡田恵和、監督＝松永大司、プロデューサー＝岡野真紀子、東京ドラマアウォード単発ドラマ部門優秀賞)

リモートドラマ「Living」全4話

(NHK、5月30日、6月6日、1話＝15分)

奇才作家が紡ぐ4つの家族の物語で、阿部サダヲが演じる作家の部屋と、実際の姉妹(広瀬アリス、広瀬すず)や兄妹(永山瑛太、永山絢斗)、夫婦(中尾明慶、仲里依紗／青木崇高、優香＝声の出演)が演じる家族の部屋のシーンをリモートで結んで、哲学的なファンタジーを紡ぐ。

締め切りまで残り1時間に迫った作家にテーブルの上に転がったどんぐりの実(声＝壇蜜)が話しかけてくる。戸惑いながらも彼は、ここ数日こもりっきりだった自分の部屋の外ではすでに人類が減っているのではないか、といった思いをどんぐりにもらす。人類が減るのは素晴らしいと返されて、彼は人間の長所について書き始める。人はもともと弱者だったがみんなで力を合わせて弱者を守る。それが長所だった……?人間の未来は……?ドラマはそんなテーマを会話劇の中にファンタジックに紡いでいる。(作＝坂元裕二、演出＝加藤拓、西村武五郎、制作統括＝訓覇圭、プロデューサー＝矢部誠人、大越大士)

「世界は3で出来ている」

(フジテレビ、6月11日)

ソーシャルディスタンスドラマと銘打って制作された作品。林遣都が、29歳の一卵性三つ子を一人三役で演じ、兄弟ならではの三者三様を描いた。

緊急事態宣言が明けてまもなくのある日、次男の勇人のもとを長男の泰斗と三男の三雄が訪れる。これまで、会社を辞めたいと言っていた次男はリモートワークが性にあって今は活き活きとしている。農業を営む三男はネット販売が好調だ。長男は几帳面で性格でコロナ禍の生活様式をしっかりと守って生活している。語られる近況や兄弟の思い出のなかにコロナ禍で感じた素朴な気持ちが散りばめられていた。(脚本＝水橋文美江、監督・プロデューサー＝中江功)

「これっきりサマー」全5話

(NHK大阪、8月17日～21日、

1～3話＝2分、4・5話＝3分)

2020年、コロナ禍の大阪に住む高校生の青春を瑞々しく描いた作品。コロナ禍の夏さえも“かけがえのな

いもの”として描く。まさに、木皿泉ならではの青春ドラマである。

感染症対策で夏のイベントが軒並み中止となるなか、甲子園での活躍が期待されていた高校球児の薫(岡田健史)と、夏フェス(野外のコンサートイベント)を楽しみにしていたロック少女・香(南沙良)が土手で偶然に出会う。二人とも心の拠り所を奪われて途方に暮れていたが、会話を交わすうちに互いの境遇を知る。そして互いに思いやり、彼らなりにしなやかにコロナ禍の夏の思い出をつくる。(作＝木皿泉、制作統括＝内田ゆき、演出＝泉並敬眞)

ドラマ&ドキュメント「不要不急の銀河」

(NHK、7月23日、拡大版は9月26日)

三密を避けなければならない中で、ドラマという三密創作をしていいのかどうか。その問いに真正面から向き合ったドキュメンタリーとドラマ。

まず、コロナ禍でのキーワード「不要不急」をテーマとするドラマの制作現場のドキュメンタリーで、井上剛監督が、撮影のためのリモート医療会議(5月15日)で次のように語る。「この時期ドラマとか撮っていいんですかね。ドラマ見たかったです?」、「一番三密なんですよ、ドラマの現場って。今の流れと思いきり矛盾していて、人の距離感、離れたり近づいたりするのが、ドラマの中の核になってる」。そして、そういった問題意識の下、北九州の産業医科大の医師たちとのリモート会議、医療監修の医師の指導など、手探りのドラマ制作が緊迫感をもって伝えられる。

さらにそれを受けて、ドラマ「不要不急の銀河」が放送される。舞台は緊急事態宣言下で営業を自粛スナック「銀河」。自粛を続けるか店を開けるか。スナックを営む夫婦(リリーフランキー、夏帆)の葛藤に、祖父母や長男らの人生も絡んで、その人生模様からスナックだけでなく、アートといったものに携わる者を締め付ける不要不急の息苦しさが漏れてくる。(原作・脚本＝又吉直樹、演出＝井上剛、出演＝リリー・フランキー、夏帆、片桐はいり、鈴木福、プロデュース＝家富未央、制作統括＝杉江亮彦、篠原圭、音楽＝大友良英)

この他、リモートドラマと称されるものには、**特集ドラマ「JOKE～2022パニック配信!」**(NHK、8月10日、作＝宮藤官九郎、演出＝水田信生、主演＝生田斗真、制作統括＝訓覇圭、仲野尚之、音楽＝平野義久)、「**ダブルブックイング**」(日本テレビ、6月28日、脚本＝森ハヤシ、演出＝水野格、編集＝和田剛、主演＝千葉雄大、チーフ・プロデューサー＝池田健司、プロデューサー＝小田玲奈、大倉寛子)、「**リモートで殺される**」(日本テレビ、7月26日、企画・原案＝秋元康、監督＝中田秀夫、脚本＝本麻布ファクトリー、主演＝本田

翼、新田真剣佑、柄本時生、プロデューサー＝上野浩之、畠山直人、森田美桜、チーフプロデューサー＝福士睦、音楽＝川井憲次)といったものがある。

〈単発ドラマ〉

コロナ禍の影響もあってか、単発ドラマにはこれといった作品は少ない。あえていえば、「ストレンジャー～上海の芥川龍之介～」の映像美が目された。

スペシャルドラマ「ストレンジャー～上海の芥川龍之介～」

(NHK、2019年12月30日)

芥川龍之介が生きた時代(1920年代)の上海の街と人から漂う華美と腐臭が、禍々しい臨場感と圧倒的な映像美をもって描かれた(8K作品)。

1921年(大正10年)、当時29歳の芥川龍之介(松田龍平)は新聞社の特派員として上海に渡る。子供の頃から「西遊記」などに親しんできた彼にとっては憧れの中国だったが、当時の中国は動乱の最中で混乱を極めていた。彼は、そこで、革命下で政治と向き合う知識人や、裏路地で日々をしたたかに生き抜く妓楼の人々と出会う。この後者の街と人民の姿に今に通じるリアリティがある。日本映画界をけん引するカメラマン・北信康(撮影監督)がほぼ全編を上海で撮影した。(作＝渡辺あや、演出＝加藤拓、制作統括＝勝田夏子、出演＝岡部たかし、中村ゆり、奈緒、金世佳ほか、原案＝芥川龍之介「上海遊記」ほか、令和元2度(第75回)文化庁芸術祭賞テレビ・ドラマ部門最優秀賞)

フジテレビ開局60周年特別企画「教場」

(フジテレビ、1月4日、5日)

警察学校を舞台にした群像ミステリードラマで、青春ドラマ、学園ドラマとミステリーの融合が新鮮な緊張感を生んでいた。教官として赴任した風間公親(木村拓哉)は、「警察学校は適正のない人間をふるい落とす場」と考え、生徒たちに過酷な試練を課す。冷酷な教師に追い詰められる生徒たちの群像劇に迫力があつた。生徒たちを極限まで追い詰め、それぞれが抱える弱さや葛藤をみつめさせる。生徒たちの好演も目をひいた。(脚本＝君塚良一、演出＝中江功、出演＝工藤阿須加、川口春奈、林遣都、葵かなほか、プロデュース＝中江功、西坂瑞城、高石明彦、原作＝長岡弘樹、東京ドラマアウォード単発ドラマ部門最優秀賞)

ドラマスペシャル「スイッチ」

(テレビ朝日、6月21日)

元恋人の検事と弁護士のリールサスペンス&ラブストーリーと銘打たれた通り、恋愛模様と事件解決

が重層的なサスペンスとして絶妙な味わいを生んでいた。横浜地検の検事・駒月直(阿部サダヲ)と弁護士・薦谷円(松たか子)は、学生時代から7年間付き合っていた恋人同士だ。別れた後もお互いの恋人を紹介したりして、13年間、腐れ縁を続けている。二人が担当する事件の真相が明らかになるにつれて、彼らを結びつけるものが何か明らかになる。知り合ったきっかけ、ほんのささいな思い出、別れたきっかけ……、共有する経験のひとつひとつの積み重ねが重く心に響くヒューマンドラマともいえる。(脚本=坂元裕二、監督=月川翔、プロデューサー=三輪祐見子、ゼネラルプロデューサー=中川慎子、浅井千瑞、東京ドラマアウォード単発ドラマ部門優秀賞)

〈ローカルドラマ〉

地方局制作のドラマはその地の風土に根ざしたものが多かったが、2020年には時代の問題や人間の在り様を、独自の切り口で描こうとするものが多くなっている。若い制作者が増えていることもあるが、今後の展開が注目されるところである。

「スナイパー 時村正義の働き方改革」

(CBC、3月12日～26日、全3回)

政府の情報機関に所属する一流スナイパーが、2019年にスタートした働き方改革の大きな柱である長時間労働の是正を求められる。そういった設定の下に時代のテーマをエンタテインメント化した中部日本放送の企画力が光る。

政府の情報機関に所属する一流スナイパーの時村正義(高杉亘)は、成果もトップだが、残業時間もトップだ。そんな彼の張り込み現場に人事部の早川カオリ(高田夏帆)が現れて、彼の働き方を管理する。「残業ゼロで世界の平和を守ってもらいます!」と言い放つ彼女に時村もタジタジになる。スナイパーという特殊な職業に「働き方改革」を適用しようとするアイデアが秀逸だ。仕事へのプライドとは何か、新人教育はどうあるべきか、日本の企業の問題点は何かといった問題の核心をワンシチュエーションの二人のかけあいで楽しく見せた。(脚本=政池洋佑、演出=吉村慶介、プロデューサー=尾関美有、柳川由起子、日本民間放送連盟賞テレビドラマ番組最優秀、令和2年度(第75回)文化庁芸術祭賞優秀賞)

「ヴィレヴァン2!～七人のお侍編～」

(メ〜テレ、10月27日～全6回予定)

名古屋テレビ放送が、名古屋発祥の実在の書店「ヴィレヴァン」をモデルに描いたシリーズの2作目。世の常識から逸脱する店員の描写に、ロー

カルカルチャーの片鱗がうかがわれる。

「ヴィレヴァン」は遊べる本屋をテーマに、書籍だけでなく雑貨も取り扱い、サブカルチャーの発信地としても人気が高い。ドラマではその店員たちを描いているのだが、彼らはしばしば世の常識から逸脱してしまう。大型ショッピングモールに異動になった杉下(岡山天音)は、モールの出店規約をことごとく破り、規則(ルール)とのせめぎ合いを繰り広げる。その武勇伝ともいえるような情熱的な働きぶりがいかにも個性的だ。(脚本=いながききよたか、音楽=出羽良彰、チーフプロデューサー=太田雅人、プロデューサー=高橋孝太、太田雅人、松岡達矢、後藤庸介、監督=後藤庸介、船谷純矢)

この他、ローカル局の取獲としては、南海放送のドキュメンタリーをドラマ化した「記憶の葉っぱ」(5月30日、主演=梶形浩人、松本久美、脚本・演出=岩城一平、5月30日、日本民間放送連盟賞優秀賞)、関西テレビ放送と映像配信サービスU-Nextの「あと3回、君に会える」(脚本=大島里美、演出=萩原健太郎、主演=山本美月、眞栄田郷敦、3月31日、令和元2度(第75回)文化庁芸術祭賞テレビ・ドラマ優秀賞)があげられる。

[特集]

新型コロナウイルスに揺れた2020年の演劇界 杉山 弘

2020年は新型コロナウイルスが世界中で蔓延し、国内では2月になって感染者の増加が連日報道されるようになって、不要不急の外出を控える人が増えていった。特に不特定多数の人が集まる劇場は流行語大賞にも選ばれた「3密」(密閉、密集、密接)の状態を作りやすく、公演の中止や延期を余儀なくされる事態を招きコロナの直撃を受けた。揺れに揺れた2020年の演劇界を、劇場や劇団、演劇人たちの動きとともに振り返った。(敬称略)

1月15日に国内初の感染者が確認され、2月3日には感染者712人、死者13人を出したクルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス号」の検疫が開始された。その後も大阪のライブハウスをはじめ、スポーツジムやデイスーパー施設での集団感染と全国的に広がっていく。2月の劇場街は新型コロナウイルスへの未知の恐怖に加え、ワクチンや特效薬もないことから警戒して外出を控え、観劇を諦めた人の空席が徐々に目立つようになっていく。それでも主催者は「最大の注意を払いつつ実施」と様子見だったが、26日に事態が大きく動く。感染拡大防止のため政府がスポーツ・文化イベントの自粛を要請。これを受けて、東京の国立劇場をはじめ、新国立劇場、国立演芸場、国立能楽堂、大阪の国立文楽劇場がそろって28日からの全主催公演中止を決定。劇団四季も27日からの全公演(東京・京都・札幌・大阪・福岡)の中止を発表した。翌27日には、東宝、松竹、ホリプロなどの大手興行会社や宝塚歌劇団、東京芸術劇場や世田谷パブリックシアター、彩の国さいたま芸術劇場、KAAT神奈川芸術劇場などの公共劇場が次々と主催公演の中止を決定し、世田谷パブリックシアター『お勢、断行』(2月28日～3月11日)、東京芸術劇場『カノン』(3月2日～15日)、無名塾『べてん師タルチュフ』東京公演(3月8日～15日)、ブロードウェイミュージカル『RENT』来日公演(3月12日～29日)、東京演劇集団風『異邦人』(3月13日～17日)などが全公演中止となった。日本演出者協会(流山児祥理事長)も、文化庁委託事業の「若手演出家コンクール2019最終審査」(3月3日～8日)を無観客での非公開審査会に変更した。

この逆風の中で公演を実施した劇団も少なくない。中津留章仁が主宰する小劇団・TRASHMASTERS(トラッシュマスターズ)は統合型リゾート(IR)誘致の是非を問い掛ける新作『対岸の絢爛』公演(3月6日～15日)を予定通り実施した。劇場という密閉空間に観客を迎えるための配慮、たとえば、出演者・スタッフの

体調管理、接客スタッフのマスク着用、会場やロビーの換気・清掃・消毒、入場時に観客全員に消毒用アルコールを手指に噴霧し、咳エチケットへの協力を依頼したほか、パイプ椅子の間隔を広げて配置するなど多岐にわたる配慮で公演に臨んだ。中津留は、「IR問題の賛否両論が渦巻くこの時期にどうしても上演しなかった。表現したいという気持ちを優先させました」と苦渋の胸の内を明かす。3月1日に演出家の野田秀樹は自身のウェブサイトへ「公演中止で本当に良いのか」という意見書を掲載。「演劇は観客がいて初めて成り立つ芸術です。スポーツイベントのように無観客で成り立つわけではありません。劇場公演の中止は、考える限りの手を尽くした上での、最後の最後の苦渋の決断であるべきです」と持論を展開した。ライブ芸術の演劇は俳優と観客が同じ時間と空間を共有し、その場で生まれ消えていく。この演劇の本質を社会に訴えた真つ当な意見だったが、コロナ禍に当惑している人たちから「スポーツを見下している」「演劇だけが特別なのか」などの過剰反応を受ける事態も招いてしまった。

貸館公演に関しては各劇場とも最終的には「主催者判断」に委ね、中止した場合の会場費や舞台設備費、チケットの払い戻しの手数料などは主催者側の負担となるケースが大半だった。中止による売り上げの減少も3月15日時点で数億円にのぼる会社があり、期間が延びるほど経済的損失が膨れ上がって経営を圧迫し、死活問題へと進展しかねない状況となった。一方、実施した場合もキャンセルによる払い戻しに応じざるを得ない雰囲気や醸成された。観客数の落ち込みで想定した収入が見込めないことに加え、感染予防対策の費用も加算しなければならない。特に、稽古場使用料やチラシ制作費、美術発注費などまとまった額の初期投資を済ませ、ギリギリの収支で予算を組んでいた小劇場の劇団にとっては、「中止」「実施」のいずれを選択しても赤字は必至となり、チケット収入で経済的な損失を最小限に食い止めるための「実施」という側面があったことは否めない。このダメージを回復出来ないまま、資金難で次回公演が見込めない劇団や解散に追い込まれる劇団が出ないとも限らず、まさに「(公演を)やるも地獄、やらないも地獄」の迷宮に追い込まれてしまった。

この混乱の中、ホリプロやワタナベエンターテインメント、オールスタッフなどが加盟する日本音楽事業者協会(堀義貴会長)は3月4日に観客へ向けたメッセージを発信した。このメッセージでは、観客の健康

を優先して大多数の公演を中止・延期した事実に触れた後、「開催することで得られる充実感や達成感、オーディエンスの皆さんと分かち合えるかけがえのない喜びなど、経済的な損失以上に、その代償は大きなものがあります」と訴え、「新型コロナウイルスに1日も早く打ち克ち、共に楽しいエンターテインメント空間を描けることを願っています」と結んでいる。公演実施に対して「身勝手な芸術家」とバッシングする意見がネット上で飛び交っていることに対しては柔らかな表現で反論しながら、社会の中に存在するエンターテインメントを強調した上で、「日常生活」が戻るまで観客と共闘していくことをアピールした。

また、政府の自粛要請に対し、日本俳優連合(西田敏行理事長)は5日、「出演者へのキャンセル料等の話し合いには到底至らないケースが多く、生活に困窮する事態が見えています。文化と芸能界を支える俳優へご配慮くださいますよう」と内閣府と厚生労働省へ要望書を出す。これを受け政府は10日、「事業基盤が弱く、収入の減少が生活基盤の悪化に直結しやすいフリーランスに対する影響を最小限とする」よう発注事業者への要請を表明している。しかし、事態は悪化の一途をたどる。11日に世界保健機関(WHO)が世界的な大流行となる「パンデミック」を表明。14日には「新型コロナウイルス特措法」が施行され、国民の行動を制限する緊急事態宣言の発令が可能になった。東京五輪の延期が固まった直後の23日に東京都の小池百合子知事が緊急会見を開き、「オーバーシュート」「ロックダウン」という強い言葉を用いて都民により厳しい自粛を要請。29日に人気コメディアン志村けんさんが感染による肺炎で死去したことで、フェーズが一気に変わってしまった。

コロナ禍に応じた新しい動き

4月7日に政府が東京や大阪、福岡、神奈川など7都府県に緊急事態宣言を発令。16日には全国に拡大し、日本の劇場街は演劇公演のない日々が始まる。これにより5〜7月に予定されていた歌舞伎座『十三代目市川團十郎白猿襲名披露公演』、東宝『エリザベート』『ミス・サイゴン』の大型ミュージカル、新国立劇場では全キャストをオーディションで選んだ『反応工程』や長澤まさみの一人芝居『ガールズ&ボーイズ』、シス・カンパニー『桜の園』、大人計画ウーマンリブ『もうがまんできない』、パルコ『佐渡島他吉の生涯』、文学座『熱海殺人事件』などが公演中止となった。また、地方都市での演劇鑑賞会や学校公演に経営的に依存していた新劇系の劇団も、他県への移動禁止や学校の休校で中止が決まり、損失額が補填されないままの状態におかれました。

公演中止で経済的なダメージを負うことになった

興行会社や劇場、劇団などからは、政府による文化支援策を求める声が上がってくる。東宝、松竹、劇団四季、紀伊國屋ホール、NODA・MAP、シス・カンパニーなどで組織した「緊急事態舞台芸術ネットワーク」は、5月14日に緊急アンケート結果をもとに、大型公演を行う16団体のうち6団体が事業継続は困難か大幅縮小が不可避と回答した、と発表。劇作家や演出家、俳優に加え、ライブハウスやミニシアターの関係者などで組織した「We Need Culture」は、22日に芸術文化振興基金を政府に求める要望書を提出。これに対し、政府は560億円の第二次補正予算を組んで芸術文化への支援策を打ち出した。文化庁の年間予算額は約1000億円で、その半額は文化財予算に充てられていた状況下であって、この芸術文化支援策は画期的な内容でもあった。このほか、経済産業省が「持続化給付金」や一時的に業績が悪化した団体へ運転資金を実質無利子で融資する「セーフティネット貸付」、無観客公演などの動画制作による海外向けPR動画のデジタル配信を支援する「J-LODlive」などで、厚生労働省が雇用維持のための休業手当や賃金の一部を助成する「雇用調整助成金」でバックアップする手厚さも見せた。

一方、個人や団体に劇団を支援するクラウドファンディングも次々とネット上に立ち上がった。劇団四季は6月末にクラウドファンディングを呼びかけ、4日間で目標とした1億円を集めた(期限とした9月末までに2・1億円が集まる)。吉田智啓樹社長は「消失した売り上げの補完になりふり構わずチャレンジするという経営方針に加え、演劇界の窮状を訴えて実感してもらうためでした」と語る。稲盛財団による「新型コロナウイルス影響下における文化芸術活動への支援」では3〜4月に500万円以上の機会損失のあった実演団体への資金援助を決め、74団体に総額3億5000万円が助成された。日本全国の小劇場演劇を守るため、集まった金額から手数料などを差し引き、小劇場に均等分配する「小劇場エイド基金」プロジェクトも5月1日にスタートした。

劇場再開に目途が立たないことなどから、インターネットを使って演劇的な表現を発信する「オンライン演劇」の動きも目立ち始める。俳優の近藤芳正が発起人となり、ウェブ会議システムで離れた場所にいる出演者たちをつないだ三谷幸作『12人の優しい日本人』を配信。緊急事態宣言直後に結成された劇団ノーマーツは、企画会議やオーディション、稽古、本番をすべてリモートで行う創作活動を始め、長編第1作『門外不出モロトリアム』を発表した。伝統芸能では松本幸四郎が中心となり、『仮名手本忠臣蔵』全段を再構成した物語を、俳優1人が映る形式で配信する『図夢(ズーム)歌舞伎』を有料ライブ配信。5年前から「8K」の映像システムを使ったオンライン演劇の可能性を探ってい

た愛媛の坊っちゃん劇場からは、カメラ1台のロングショットで収録し、映像を大型スクリーンに上映することで臨場感あふれる舞台が再現できる事例も報告された。

またリモートで舞台演出を試みるケースも登場した。入国制限で来日出来ない外国人演出家が、ニューヨークやロンドンの自宅からモニター越しに日本人俳優が稽古する模様を注視し、演出するという新たな方式で、東急シアターオーブの『ハウ・トゥー・サクシード』(9月4日～20日)、シアターコクーン『十二人の怒れる男』(9月11日～10月4日)などでは、時差を克服しながら演出家が東京のライブ中継の動画や文章報告を受け、日本のスタッフと意見を交わして稽古を進めた。

さらに、地域に根付いた活動から東京とは違う演劇祭が開かれたことも見逃せない。静岡県舞台芸術センター(SPAC)では毎年ゴールデンウィーク期に開催してきた『ふじのくににせかい演劇祭』の中止を決めると同時に、ネットを使つての『くものうしにせかい演劇祭2020』(4月25日～5月6日)の開催に切り替えた。俳優が電話や訪問をする「出前演劇」で孤立者とコミュニケーションを結ぶ実験をするほか、来日予定だった海外のアーティストの作品を映像で配信し、トークショーも開催した。富山県南砺市にある利賀芸術公園では『SCOTサマー・シーズン』(8月28日～9月6日)の演劇祭が開催され、例年のように来日するカンパニーや観客はなかったが、野外劇場を使った『世界の果てからここにちは』など3作品を上演した。このほか、主宰する劇団「青年団」とともに兵庫県豊岡市に移住した平田オリザは地域密着による集団活動を始め、9月にはフェスティバル・ディレクターとして第1回となる『豊岡演劇祭2020』(9月9日～22日)を開催。国際共同制作は中止としたものの、公式プログラム11作品を実現し、国内の上演ネットワークの広がりを見せた。鳥取でも『鳥の演劇祭13』(9月12日～27日)が開催され、人口が集中する東京や大阪などの大都市では実現しにくい演劇祭の可能性を示した。

再開直後に劇場クラスターが発生

5月14日に緊急事態宣言が39県で解除、25日に全面解除となり、6月19日には都道府県をまたぐ移動自粛が解除され、同日からプロ野球、27日からJリーグがそれぞれ無観客で開幕。東京ディズニーランドも7月1日からの再開を決め、日常生活が戻りつつある中で劇場再開の動きも本格化する。国立劇場、新国立劇場、東京芸術劇場など全国の約1300施設でつくる全国公立文化施設協会(日枝久会長)は、新型コロナウイルス感染拡大で閉館中の施設の再開に向けたガイドラインを公表した。再開の条件として感染予防のため最大限

の対策をとった上で、施設を管理する自治体やイベントの主催者に協力を求める具体的な対策を提示し、主催者には入場者の人数調整を図り、出来る範囲で名前や緊急連絡先を把握するように求めた。また、前後左右を空けた座席配置や客席最前列席は舞台前から十分距離をとることなど、細かい運営方針を提案した。出演者には「表現上困難な場合を除き原則としてマスク着用を求める」とし、観客とのハイタッチなどの演出は避け、出演者の間でも十分な間隔をとるように求めている。ここで関係者を悩ませたのが、「収容率50%」を上限とする入場制限で、従来のチケット料金では採算が取れず、赤字を覚悟して公演に踏み切る決断を迫られた。

それでも、7月になると隣光群が3日から『天神さまのほそみち』、こまつ座が6日から『人間合格』、新国立劇場が9日から『願いがかなうぐつぐつカクテル』、世田谷パブリックシアターが11日から『殺意 ストリップショウ』、劇団四季が14日から『ライオンキング』と『マンマ・ミーア!』、宝塚歌劇団が17日から花組『はいからさんが通る』、東宝が18日から『ジャージー・ボーイズ・イン・コンサート』で公演活動を再開させる。8月1日には5か月ぶりに歌舞伎座も再開。客席は前後左右を1席ずつ空けた「市松模様」配置とし、俳優が往来する花道に近い席も空席とした。「大向こう」からの掛け声は飛沫が飛ぶ可能性を考慮して自粛となり、長く大きな拍手での声援が変わった。また公演そのものも初めて4部制とし、各1時間前後の演目に絞り、楽屋1人1室とし、各部が終わるごとに俳優とスタッフが入れ替えることで感染リスクを減らした。また、入場の際にも観客の手指消毒や飲食物の販売も水や茶などに限定された。このほかパルコ『大地』(7月1日～8月8日)では「ソーシャル・ディスタンス・バージョン」と銘打ち、俳優同士でけんかするシーンを取っ組み合いではなく枕を投げる演出に変え、東京芸術劇場『赤鬼』(7月24日～8月16日)では、舞台と客席を透明なビニールシートで仕切り、感染予防を舞台美術の一部として見せるなどの工夫を施し、新国立劇場『イヌビト～犬人～』(8月5日～16日)では出演者がマウスガードを着けて演じた。「3密」回避と飛沫感染防止を図りながらの上演が始まった。

ところが、丁寧な感染予防対策の下で活動を再開させた直後、ショッキングなニュースが飛び込んでくる。7月12日に小劇場の新宿シアターモリエールで劇場クラスターが発生したことが発覚。ライズコミュニケーション『THE★JINROーイケメン人狼アイドルは誰だ!!ー』(6月30日～7月5日)で、俳優・スタッフ21人、観客16人の計37人の感染が明らかになった。客席数は50%の90席だったものの、楽屋は過密で換気が不十分だったことや、スタッフのフェイスシールド未着

用、公演後の物販や握手会での混雑などが原因と見られ、出演者やスタッフ、観客全員の約850人が濃厚接触者と認定され、東京や神奈川、埼玉、千葉の首都圏をはじめ、愛知や京都など11都府県での感染者が115人にのぼった。群馬県では観客として訪れて感染した女性保育教諭の勤め先の認定こども園で同僚が2次感染する騒ぎとなった。追い打ちをかけるように、20日に劇団四季の『マンマ・ミーア!』で所属俳優一人の感染が判明し「関係者全員の陰性が確認されるまで」と2ステージを中止。歌舞伎座では8月5日に『義経千本桜 吉野山』で関係者一人に発熱があり、当日の公演を中止した。宝塚歌劇団花組では4日に『はいからさんが通る』で出演者や関係者11人の感染が確認され、兵庫県は「クラスター」に認定。東京でも6日、星組『眩耀の谷〜舞い降りた新星〜』公演の出演者1名からの感染が確認され、公演が21日に延期されるなど、公演の一部が休止となる事態が相次いだ。劇場全体のイメージ低下という暗い影を落とすことになり、再開した劇場関係者は一層の注意喚起を必要とされていく。また、長期間の劇場閉鎖による公演中止を受けて、高松宮殿下記念世界文化賞(日本美術協会主催)、鶴屋南北戯曲賞(光文文化財団主催)、ハヤカワ「悲劇喜劇」賞(早川書房など主催)などの演劇賞の中止も決まる。

市場規模は前年比約8割減に

9月19日に政府による観客数制限の緩和で演劇公演の満席が容認され、10月中旬からはチケット価格の2割相当(上限2000円)を支援する「Go To イベント」も実施され、本格的な劇場再開が始まる。この時期になると、満員電車が復活し、「Go To トラベル」で観光地はごった返す状態となった。欧州各国が再規制に乗り出したのとは対照的に、「勝負の3週間」と政府が位置付けた11月の3連休後の第3波到来で感染者が急激に拡大していく。演劇界も例外ではなく、10月10日にさいたま市にある劇団ミュージカル座で10〜60歳代の俳優やスタッフら関係者62人の感染者が確認され、「クラスター」に認定される。国立劇場11月公演第2部『毛谷村』、KAAT神奈川芸術劇場のダンス公演『Kni fe』、東宝『RENT』公演などが出演者やスタッフの感染で中止・延期となった。せりふ主体のストレートプレイよりも歌うことでウイルスが拡散しやすいミュージカルの出演者に感染例が多いことや、メンバーが固定されている劇団公演よりも不特定多数の出演者やスタッフが出入りするプロデュース公演に感染例が多いことなど、コロナ禍の傾向も徐々に明らかになってきた。

松竹の2021年決算の第2四半期の累計によると、3月から8月の6か月の演劇部門売り上げは、20億7200万円で前年同期の142億6500万円の14.5%でしかな

い。前年の約85%以上、120億円近くの売り上げが消えたことになる。東宝も3月から8月の演劇部門売り上げは20億6900万円の前年同期の87億3000万円の23.7%にとどまった。また、劇団四季は2月27日から7月13日までの計1103公演の中止で約85億円の売り上げが消失し、劇場再開後も3割の観客しか戻っていない状況だ。10月27日に発表された「びあ総研」の調査によると、新型コロナウイルスの感染拡大による影響で、演劇や音楽コンサートなどのチケット推計販売額の合計「ライブ・エンタテインメント市場規模」について、2020年は前年比約8割減の1306億円になると試算している。

上演団体も劇場も可能な限りの感染対策をとり、俳優やスタッフのPCR検査を定期的に実施。感染者が出た場合は誠実な発表を心掛け中止・延期を決断した。冷静に振り返れば、出演者と観客、もしくは観客同士での感染拡大は新宿シアターモリエールの1件にとどまっている。劇場再開の目途すら立っていない欧米各国に比べれば、日本は公演を再開し、劇場に人が戻ってきていることを考えれば、世界の演劇人の希望の光でもあった。しかし、事態の終息にはほど遠く、薄氷を踏む思いで公演を続ける中で、12月には全国で1日3000人を超す感染者数にのぼる日が続いた。そして、年を跨いだ2021年1月7日に東京、神奈川、埼玉、千葉の1都3県に緊急事態宣言が再び発令された。今回は劇場公演の中止要請はなかったものの、周知期間を経た12日から客席数は再び「収容率50%以下」の制限が設けられた。また、午後8時以降の外出自粛要請を受け、各劇場、各劇団は夜公演の開演時間を早めて8時までに終演するように変更するなどの対応に迫られた。13日には大阪、京都、愛知などの7府県への再発令が追加された。

あぶり出された課題

厄介なコロナ禍に悪戦苦闘する中、新しい動きも芽生えてきている。一つは他分野の芸術家たちとの横の連携が生まれたことだ。これまで、演劇界だけの論理で物事を進める傾向が強かったが、コロナ禍ではパレエ団や交響楽団、ライブハウス、ミニシアターなど芸術文化を担う各種団体と手を結び、政府や社会に支援を求め、行動に移していった。たとえば、全国公立文化施設協会のガイドライン作りや芸術文化振興基金の創設要求などの活動を展開し、横の広がりを持ちながら社会の中での存在としてアピールを始めた。もう一つは縦の連携が生まれたことだ。世代間の交流が少なく分断状態にあったが、老舗の劇団から若手の小劇団までが共通の危機意識を持ち、公演を続けるための方策を「緊急事態舞台芸術ネットワーク」などを通じて醸成していった。東京芸術劇場の高萩宏副館長は、「これ

まで個別に頑張ってきたが、問題を共有し、日本の演劇状況や才能の育て方、独自のコンテンツを守るために、国に対してもしっかりと説明するコミュニケーション力が求められる。その風通しが良くなった」と話す。

その一方で課題もあぶり出された。ひとつは興行形態。出演者に替えがきかない現在の公演システムでは、「俳優の感染＝中止・延期」となってしまう。何らかの緊急事態が起こって出演俳優が演じられなくなったときに備え、代役ができるように別の人間がその役を稽古しておく「アンダースタディ」方式は検討に値する。11月に劇団四季が『アラジン』の出演者ら10人の感染者があり公演中止となった際に俳優を総入れ替えして5日後に再開したことは好例となった。また、劇団が一定数の演目を毎晩換えて上演する「レパートリー・システム」の導入は、感染者が出た場合に感染していない人だけで上演できる演目に変えることが出来る。すべての興行に通用するわけではないが、欧米で慣例化しているこれらの制度は、それぞれの公演主体の特色を生かした上演形態を洗い直すきっかけにはならないだろうか。このほか、商業演劇での月単位での興行や長い休憩時間は見直してもいい。劇場利用が難しいのであれば、野外劇を視野に入れてもいい。この困難な時期を乗り切る柔軟な対応が求められる。

もう一点は芸術文化への国民の理解度の低さ。欧州各国の劇場の状況を見ると、英国・ロンドンでは3月23日に法的拘束力のある「ロックダウン」が始まり、ウエストエンドをはじめとするすべての劇場が閉鎖されたが、7月にジョンソン首相が「劇場や美術館は国にとっての心臓の鼓動」と芸術文化救済資金として約2100億円の助成を決めている。ドイツではメルケル首相が「芸術支援は政府の最優先事項」と位置づけ、小規模事業者に緊急支援したほか、総額で1200億円以上の文化支援策が発表された。フランスでも総額約6000億円の文化支援が決まっている。日本の芸術支援策も従来に比べれば配慮されるようになったが、「不要不急」論が出るほど、芸術文化への意識の差はまだ大きい。

図らずもコロナ禍は演劇界に残っていた古い価値観をあぶり出す形ともなった。そして否応なく変革を促しているとは言えないだろうか。古代ギリシャ時代にアテネで流行した疫病の記述が残り、シェイクスピアもペストと戦いながら創作を続けた。それでも演劇はその生命を繋いできている。作家の塩野七生は「自由とは失敗が許されるということ。コロナ禍で停滞する今の状況は階段の踊り場にいるようなもので、これから登っていくためには、この自由を失ってはいけない」と提唱する。もちろん、検閲など国家権力の介入を排して演劇の自由を守っていくことが前提となるが、失敗を恐れない勇気とともに前に進む自由を持ち

続ける覚悟が問われている。試練の時期でもあるが、一日も早い通常の劇場街が戻って来ることを願わずにはいられない。